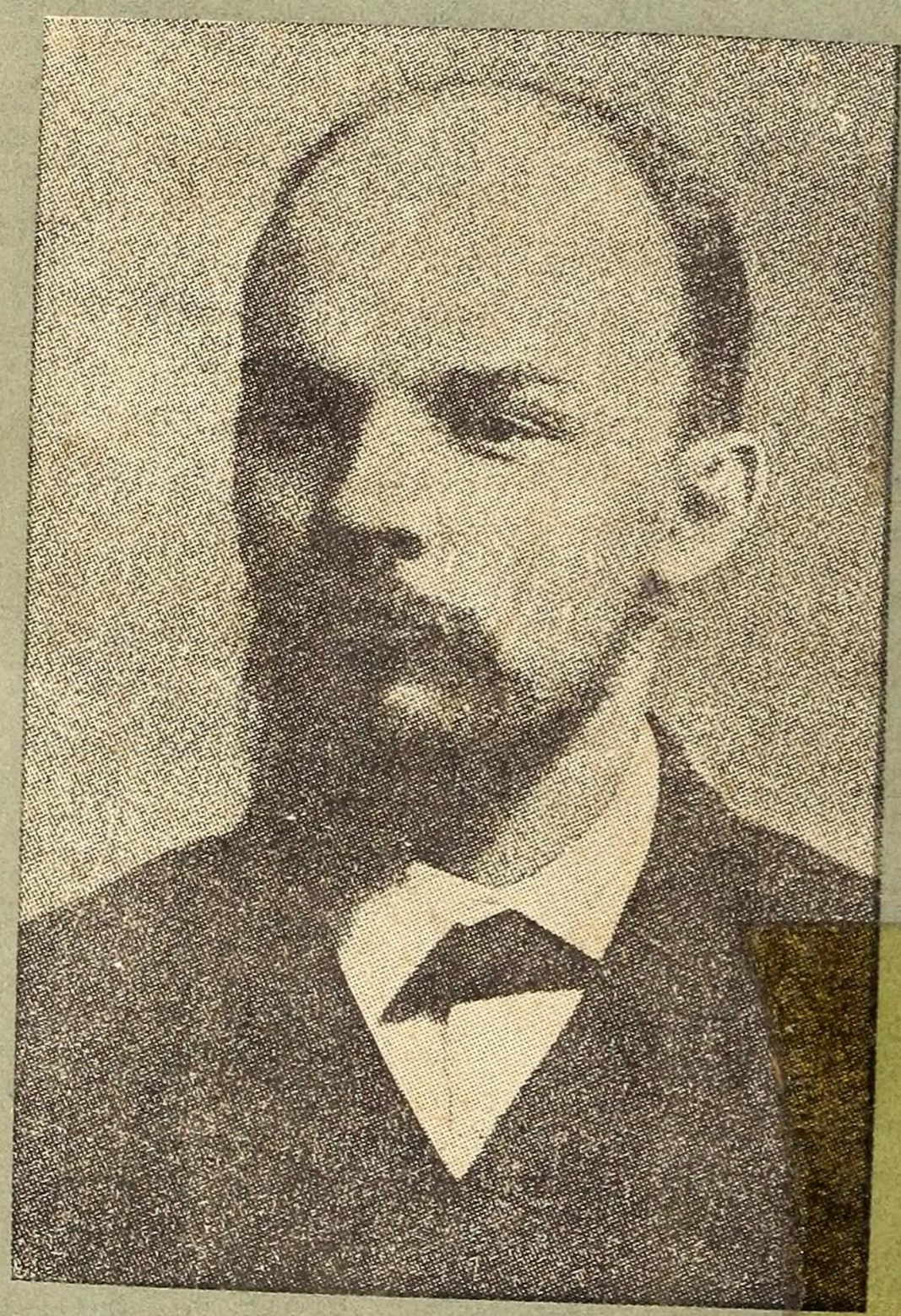
LEFT
24ColorCard CameraCrazy.com
APRIL2013
HUA JIE H.3201

ロシアにおける資本主義の發達

下　卷

ニコライ・レーニン著
山内封介譯



白揚社出版

◎

獄中人者（明治四十九年十二月）

梦上　下　然一　戎

著作集

大城

Lenin, Vladimir Ilich

レーニン著
山内封介譯

ロシアに於ける資本主義の發達 下卷

東京 白揚社版

HC334
.5
.L416
1930
Vol. 1
(Copy)
Asian
Japan
Cage

目次

第五章　工業上に於ける資本主義の初期階程……一

一、家内工業と手工業……三
二、工業に於ける小商品生産者……七
三、改革以後に於ける小營業の生長。この過程の二形態並にその意義……一三
四、小商品生産者の解體。モスクワ縣に於ける家内工業家の戸別登錄の資料……二三
五、單純なる資本主義的協業……二九
六、小營業に於ける商業資本……四六
七、『營業と農業』……六二
八、『營業と農業との結合』……七七
九、我國の農村に於ける資本主義前の經濟に就いて……八二

第六章　資本主義的粗工業と資本主義的家内作業……八九

一、粗工業の組織とその根本的特質……九一
二、ロシアの工業に於ける資本主義的粗工業……九三
(一)織　物　業……九四
(二)織物精工業の他の分派。漂布業。漂白業組織の線畫……九九
(三)製帽業。製麻業及び製繩業……一〇六
(四)木材加工業……一一三
(五)動物生産品精製業。皮革業及び毛皮業……一二〇
(六)他の動物生産品精製業……一二三
(七)鑛物生産品精製業……一四〇
(八)金屬加工業。パウロフスキイの營業……一四三
(九)他の金屬加工業……一五一

三、(十)寶石加工業。湯沸器製造業及びハーモニカ製造業……一五五
四、粗工業に於ける技術。分業とその意義……一六六
五、地方的分業及び農業と工業との分離……一七三
六、粗工業の經濟的組織……一八〇
七、粗工業に於ける商業資本と工業資本。『買占人と工場主』……一八六
八、粗工業の附帶物としての資本主義的家内作業……一九二
『家内工業』とは何か?……二〇四

第七章　大機械精工業の發達……二二五

一、工場の科學的概念と『製造所工場』統計の意義……二二七
二、我國の製造所工場統計……二三〇
三、大工業の發達に關する歴史的統計資料の研究……二四一
(一)織　物　業……二四三

四、(二)材木加工業……二五三
(三)動物生産品の化學的加工業及び製陶業……二五四
(四)冶金業……二五九
(五)食料品製造業……二六〇
(六)國産品製造業及びその他……二六五
(七)結論……二六九
五、鑛山工業の發達……二七一
六、資本主義的大企業に於ける勞働者數は增加するか?……二九一
七、蒸汽動力の統計……三一二
八、大工場の生長……三一六
九、大工業の配置……三二〇
十、林業と建築工業との發達……三四三
工場の附帶物……三五八

十一、工業と農業との完全なる分離……三六三
十二、ロシアの工業に於ける資本主義發達の三階程……三七二

第八章　國內市場の形成……三九一

一、商品流通の生長……三九三
二、商工業住民の生長……四〇三
三、雇傭勞働使用の生長……四四三
四、勞働力の爲の國內市場の形成……四五二
五、邊境地帶の意義。國內市場か國外市場か？……四六〇
六、資本主義の『使命』……四六八

附錄……四七七

一、モスクワ縣の農業的小營業に關する統計的資料表（第五章二三頁參照）……四七八

目次終

二、歐露の工場制工業に關する總計資料表（第七章二二〇頁參照）……四八四
三、歐露に於ける工場制工業の主要中心地（第七章三三二頁參照）……四八七

ロシアに於ける資本主義の發達

後篇

レーニン著作全集（一九二三年モスクワ國立出版會社發行第二版第三卷よりの譯出）

山内封介譯

第五章　工業上に於ける資本主義の初期發達階程

こん度は農業から工業へ移る。吾人の問題は、此處でも矢張り農業に關する問題と同様の範式をとる。即ち吾人は改革以後のロシアに於ける工業の形態を解剖しなければならない。加工工業上に於ける社會的經濟關係の或る組織とこの組織進化の特質とを研究しなければならない、それで先づ最も單純で最も原始的な工業形態から始めて、この形態發達の跡を調べて行かう。

一、家内工業と手工業

吾人が家内工業と名づける所のものは、未加工品を收獲する事業そのもの、内部に於て（農民の家庭に於て）收獲した未加工品を精製することである。家庭營業は、自然經濟の必然的附屬物となつてゐる。而もこの自然經濟の遺物は、小農民階級の存在する處には、殆んど必ず保存されてゐる。從つてロシアに於ける經濟上の文獻に、この種の工業（亞麻、大麻、材木及びその他の原料から自家必要品を家庭に於て製作すること）が、屢々擧げられてゐるのを見る。これは誠に自然である。然しながら現今家内工業が幾分でも廣く行き亙つてゐる處は、極めて邊鄙な或る僅かな地域に過ぎない。例へばシベリアの如きは、最近までこの邊鄙な地域に屬す

るものであつた。この形態に於ける工業は、まだ職業化してゐない。即ちこの形態に於ける營業は、農業に結びつけられ、これと一體を成してゐるのである。

家長制度の農業から分離した工業の最初の形態は、手工業である。即ち需用者の注文に應じて造る製品生産である。この場合材料を持ち出す者は、需用者なる注文人でも手工業者でもよい。手工業者に對する勞銀の支拂は、金錢で行はれることもあれば、或は現物で行はれることもある（手工業者に住所を提供したり、食物を供給したり、生産品、例へば麥紛を分與したりする）。手工業は都會生活の構成分子であると同時に農村に於ても相當に擴がり、農業の補助となつてゐる。村民の或るパーセントは、專門の手工業者である、彼等は（時として單獨に、時としては農業に關連して）皮革、靴、衣服等の製作や、鍛冶職や、家内織物の染色や、農民用布地製造や、製粉事業などに從事してゐる。

然しながら我國に於ける經濟上の統計が、極めて不滿足な狀態にある爲に、ロシアに於ける手工業の普及程度に關する正確な資料は全然ない。從つてこの工業形態を指摘したものは、農民經濟のことを記した凡ゆる書物の中よりも、寧ろ所謂『家内』工業を研究した書物の中に

部分的に散見することが出來るし（註。以上の事實を引例を以て證明することは、不可能に近いが、手工業に關する斯の如き無數の指摘は、家内工業を研究した様々な書物の中に散見することが出來る。尤も廣く一般に承認されてゐる説によると、手工業者は家内工業に屬するものではないと云ふが、吾人はこの『手工業』なる術語（テルミン）が、甚だ不明瞭であることを屬々發見する）。また政府筋の製造所工場統計中にも、これを見ることが出來る。（註。政府筋の統計の混沌たる狀態は、次の事實を見ても明瞭である。即ちこの政府筋の統計は、今日に至るまで手工業的作業場と製造工場的作業場とを區別する方法を定めてゐない。例へば六十年代に於ては、純手工業タイプの田舍の染物場の如きも、製造所及び工場の部類に入れられてゐた。一八九〇年には、農民の漂布場が、羅紗製造所と混同されてゐた。）なほ自治會統計集も、農民の生産業を登録する場合に、時々『手工業者』の一部類を特に區別して、（ルードゥネフのサラトフ自治會第一統計集の比較）建築勞働者を（流行の用語に從ひ）殘らずこの部類に加へてゐる。

この混同は、政治經濟的見地から云ふと、全然間違ひである。多數の建築勞働者は、需用者の注文に應じて働く獨立的な工業家に屬するものではなくして、請負人の支配する雇傭勞働者

の部類に入つてるからである。勿論、農村の手工業者と小商品生産者若くは雇傭勞働者とを區別することは、何うかすると困難なことがある。それでこれを區別する爲には、小工業家一人々々に就いての資料を經濟的に調査して見る必要がある。

一八九四年――一八九五年のペルミ家内工業記錄の提供する資料を研究した結果、手工業と他の形態の小工業とを嚴密に區別しようとする試みが起つた。同地方に於ける農村手工業者の數は、農民の約一パーセントに相當してゐた。それに（豫期の通り）手工業者のパーセントの最も多いのは、工業の餘り發達してゐない市外地であつた。手工業者等は、小商品生産者に比較すると、遙かに固く土地に結び付けられてゐる。即ち百人の手工業者の中で耕作者は八〇・六パーセントである。（この割合は、爾餘の『家内工業家』の場合には更に低い）。

雇傭勞働の使用は、手工業者等の間にも行はれてゐるが、この種の工業家の間には、他の工業家の間に於ける程雇傭勞働の使用は發達してゐない。また手工業者等の有つ作業場の規模も（勞働者の數による）同樣極めて微々たるものである。手工業者――耕作者の平均勞働賃銀も、年四三・九留であるのに、非耕作者の平均賃銀は、一〇二・九留である。

吾人はこの簡單な指摘に留めて置く。手工業を詳細に考察することは、吾人の問題中に入つてゐないからである。商品生産は、まだこの工業形態中に入つてゐない。この工業形態に於ては、たゞ手工業者が金錢で支拂を受けるか、或は仕事に對する報酬として貰つた生産品を賣却して、未加工原料品と生産器具とを購入するかする場合にのみ、初めて商品の流通が行はれるのである。手工業者の勞働生産物は、農民の自然經濟の範圍を殆んど脱せぬので、市場に現はれない。(註。手工業と農民の自然經濟とは、互に相接近してゐるので、時によると農民は全村の爲に手工勞働を組織しようと試みることがある。即ち農民等は或る村の全住民の爲に働く義務を手工業者に負はせて、この手工業者を支持することがある。現在斯くの如き工業組織は、たゞ例外として若くは最も邊鄙な地方に於てこれを見ることが出來る)。從つて手工業が小家長制度の農業の如き頑迷と分裂と狹隘との性質を帶びるのも當然である。この工業形態に特有な唯一の發達要素となつてゐるものは、手工業者等が金儲の爲に他の場處へ出稼に行くことである。この出稼は、特に以前我國の田舍では、極めて廣い範圍に行はれてゐた。その結果、集つて來た場處に、手工業者の獨立した作業場が設置されるやうになるのが普通であつた。

二　工業に於ける小商品生産者。小營業に於ける手工業者組合の精神

既に述べた通り、手工業者は自分の製造する生産品を有つて市場に現はれるのではないが、然し兎に角市場に現はれるやうになる。手工業者は一度市場と接觸すれば、次第に市場の爲の生産へ移つて行く。即ち手工業者は商品生産者となる。これは自然の理である。この推移は、最初試驗的に漸々と行はれる。手工業者は偶然に自分の手許に殘るか、或は漸次に造り溜めるかした生産品を販賣する。市場は最初製品を販賣する爲に極めて狹隘であるから、この推移は漸進的に益々强められて行く。從つて生産者と需用者との間の距離は、極く少しづゝ擴大されて行く。生産品は從來通りに、製造者の手から需用者の手へ直接移つて行く。のみならず、時によると生産品の販賣に先だつて生産品と農業生産品との交換が行はれることがある。(註。例へば、陶器と穀物との交換の如きである。穀物が安い時には、壺一個の等價量は、その壺一ぱいの穀物であつた)。商品經濟は發達するに從つて、商業の擴張となり、商品の買占を專門とす

る商人の出現となる。製品販賣の爲に必要な市場となるものは、小さい農村の市場若くは定期市ではなくして、(註。斯の如き農村定期市の一を研究して見ると、定期市の全流通資本の僅かに三一パーセント(五萬ルーブル中約一萬五千留ばかり)が、家内工業生産品の爲に費されたことが分る。最初小商品生産者の有つ商品賣捌市場が如何に狹隘であるかと云ふことは、ポルタワ市の靴職人がその村落の周圍僅か六十露里の間に自己の製品を賣捌いてゐると云ふ事實に依つても知られる)。縣全體であり、洲全體であり、更に國家全體であり、なほ時としては諸外國のこともある。工業生産品を商品の形に於て製造することは、工業を農業から分離し、この兩者間に相互的交換を行はしめることに最初の基礎を置くものである。ゲー・エヌ氏は自己特有の平凡で抽象的な理解を有つてゐる爲に、結局『農業から工業を分離すること』は、要するに『資本主義』の屬性であると言ひ、この分離の種々なる形態をも、また資本主義の種々なる階程をも分解研究しようとはしない。それ故に農民の營業に於ける最小の商品生産は、農業から工業を分離し始めるものであると云ふことに注目する必要がある。然しこの發達程度では、工業家と農業とは、多くの場合に於てまだ分離してはゐない。で、吾人は資本主義の階程が、更に發

達すると、工業的企業が農業的企業から如何に分離し、工業勞働者が耕作者から如何に分離するものであるかと云ふことを、これから述べることとする。

商品生産の形式がまだ幼稚な時代には、『家内工業家等』間の競爭もまた極めて穩かなものであるが、市場が擴張せられて、廣大な地域を占領するに從つて、この競爭は、次第に猛烈になり、小工業家がその實際的獨占狀態の裡に造り出した家長的な幸福を破壞するやうになる。小商品生産者は、自己の利害關係が他の社會の利害關係に反して、この獨占的狀態の保存を要求することを感ずる。從つて小商品生産者は競爭を恐れる。彼は一個人的又は團體的な凡ゆる努力をもつて競爭を抑壓し、自己の地域内に競爭著を『入れない』やうにし、一定範圍の購買者を有つてゐる小經營主の保障された境遇を鞏固にしようとする、競爭に對する此の恐怖は小商品生産者の眞の社會的天性を浮刻の如くに示すものである。それで、吾人はこれに關係ある事實を更に詳細に檢討して見ることの必要を認める。

先づ手工業に關する一例を擧げることとする。カルガ市の羊皮業者等は、羊皮を鞣す爲に他縣へ行く。羊皮業は農奴制度の廢止後衰微した。地主達は『羊皮に』多大の稅金を課し、羊皮業者

等を嚴重に監視して、彼等が『定められた自分の場處』に甘んずるやうに、そして他の羊皮業者等が他の地區へ侵入して來ないやうにした。かう云ふ風に組織された羊皮業は、極めて有利なもので、『機械』などは、五百留乃至千留で讓渡された。手工業者が他人の地域へ入り込んだら、時々流血的衝突を惹き起すやうなこともあつた。

農奴制度の撤廢は、この中世紀的な幸福を破壞した。鐵道に依る交通の便利も、亦この場合に於て競爭を激成した。その結果小工業家等は、『厭ふべき競爭』を回避する爲に、他の小工業家等に技術的發明や改良を隱蔽し、有利な仕事を敎へないやうにする傾向を示したが、この傾向は各種營業の間にさへ認められて、遂に一般的な法則であるかの如き性質を帶びるに至つた。新營業の創業者等は、即ち舊式の營業を或程度迄完成させた人々は、同村内の人々に有利な仕事を極力隱蔽し、これが爲に樣々な狡猾手段を用ひ、(例へば、他人の眼を僞瞞する爲に作業場内に舊式の設備を保存して置くが如き) 何人をもその職場内へ入れず、秘密室の中で働き、製造上のことは身内の子供等にさへ知らせぬやうにする。モスクワ縣内に於ける刷毛製造業の遲々たる發達は、現に存在してゐる生産者等が、普通自分の新競爭者を有つことを望まな

い結果で、彼等生産者は、他人に出來るだけその仕事を見せまいとし、たゞ一人の生産者だけが他人の弟子をも自分の手許に置いたと云ふことである。金物細工業で有名なニゼゴーロド縣のベズヴォードノエ村に就いても、次のやうに書かれてゐる。『珍らしいことには、ベズヴォードノエ村の住民等は、今日迄(即ち八十年代の始めまで。金物細工業は五十年代の始めから起つたものである。)隣村の農民にその技術を熱心に隱蔽してゐる。彼等は郡役所に於て技術を他村に傳へた者を處罰する規定を一度ならず作らうとした。彼等は斯かる形式を實現し得なかつたが、それでも規定は精神的に彼等各自を牽制してゐるので、彼等は自分の娘を隣村に嫁入りさせない。また出來るだけ隣村の娘を嫁に貰はない。』

經濟主義者――民衆主義者は、農民の小工業家の多數が、商品生産者に屬するものであると云ふ事實を日蔭に隱蔽して置かうと努力したばかりでなく、農民の小生産業と大工業との經濟的組織の間に存在してゐるらしい或る深い矛盾對立に就いて立派な虛構說さへも造つた。然しながらかうした見解の成立しないことは、特に前述の資料から見ても明かである。若し大工業家がその獨占的立場を安全にする爲に如何なる手段方法をも意としないとすれば、『家内工業家』

なる農民もまた、この點に於ては大工業家の肉身の兄弟である。小ブルジョアはその小資力を以て自己の階級的利益を根本的に擁護しようとし、大工場主もまた同樣の階級的利益を擁護する爲に產業保護論、プレミアム、特權及び其他に渴してゐる。(註。小ブルジョアは競爭をすると自分の滅亡となることを感じてゐるので、競爭を抑止しようとする——それは丁度理想家、即ち民衆主義者が、その心の大好きな『土臺』が資本主義に依つて絕滅されるのを感ずるが故に、資本主義を防止し、排斥し　抑止しようとするのと同じことである)。

三　改革後に於ける小營業の生長。この生長過程に於ける二つの形態と生長過程の意義

上述の事實から更に發生するものは、次の如き注目に價する小製造業の性質である。新營業の出現は、既に述べた如く、勞力が社會的に分裂し、生長して行くことを意味するものである。

從つて斯の如き過程は、各資本主義社會に農民生活と半ば自然な農業とが、樣々な程度に於て保存されてるかぎり、そして種々なる組織と古い傳統とが、(交通路の惡いのと關連して)大機械精工業によつて直接家内工業の場處の占領されて行くのを妨害してるかぎり、各資本主義社會に於て必然的に存在すべきものである。商品經濟が發達して行くに從つて必然的に起つて來るのは、農民生活中から相次いで新工業家が分離することである。そしてこの過程は、所謂新地磐を勃興させ、國内の最も時代遲れになつてゐる地方に、若くは工業の最も舊式な方面に新範圍を作り、これを來らんとする資本主義の蹂躙に準備するものである。

斯の如き資本主義の生長は、國内の他の地方に於ては、或は工業の他の方面に於ては、全く別種の現はれ方をしてゐる。即ち小職場や家内勞働者は增加せずに、却つて減少し、工場の方に呑まれて行く傾向がある。從つて或る國家の工業上に於ける資本主義の發達を研究する爲には、最も嚴密にこれ等の過程を區別する必要があるのは當然である。これ等の過程を混同すると、概念の完全な紛糾を來さゞるを得ない。(註。同一の縣内に於て同一の時に同一の營業に於て、この二つの異つた過程が混同されてゐる興味ある實例を擧げる。自動紡績機に依る紡績業

は、ヴィーツカ縣に於て、家内織物業の補助となつてゐる。この營業の發達は、商品生産業の發生を表示し、商品生産業が織物機一臺で十分間に合つて行くことを意味するものである。そこで縣内の邊鄙な場所では、縣の北方では、自動紡績機と云ふやうなものは、殆んど知られてゐない。其處には營業が新たに發生し得る。即ち營業が農民の家長制度的自然經濟に最初の破綻を作りさうである。然るに縣内の他の地方では、この營業は既に衰微しつゝある。研究家等はこの衰微は農民の間に益々廣く工場生産の綿織物が用ひられるやうになつた結果であらうと言つてゐる。從つて此處に於ける商品生産と資本主義との成長は、既に工場による小營業壓迫となつて現はれて來た。)

改革以後のロシアに於て、資本主義發達の初歩を意味する小營業の生長は、二樣に現はれたし、また現はれつゝある。第一は、小工業家と手工業者とが、經濟關係に於て最も發達した中央の住み古された諸縣を去つて、地方へ移住することである。第二は、新たに小營業を造り、土地の住民間に以前から存在してゐた小營業を擴張することである。

この二樣の過程中の最初の方は、吾人が既に述べた(四章の二)地方殖民現象の一を成してゐ

る。ニゼゴーロド、トヴェーリ、カールガ及び其他の諸縣に於ける農民の工業家は、住民の增加につれて競爭が激烈となり、資本主義的粗工業や工場が增加して、小製造業を脅威するのを感ずると同時に、まだ『職人』が少なく、手間賃が高く、そして生活費の安い南方へ逃げ出して行く。新らしい場處には、小さい作業場が造られる。この作業場は、農民の新營業の濫觴となつて、次第にその村やその附近に擴まる。斯くして長年工業の文化の發達してゐた國家の中心地點は、國內に於て移民の開始せられたばかりの新地點にも工業の文化を助長し發達せしめるのである。斯くして資本主義的關係は、(後に述べる如く、農民の小營業にも特有な關係は)全國內に傳播せられるのである。

前述の二樣の過程中の第二の方を表示する事實に移るが、此處で豫め言つて置かねばならぬことがある。それは、農民の小規模な作業場と營業との成長を例證するに留めて、それ等作業場と營業との經濟的組織問題にはまだ觸れないと云ふことである。即ちこれ等の小營業が單純な資本主義的協業と商業資本との組織を誘起するか、それともこれ等の小營業自體が資本主義的粗工業の構成分子になるかは、後に述べる所によつて明瞭になるであらう。

ニゼゴーロド縣のアルザマス郡に於ける毛皮業は、アルザマス市に興つて、次には次第に同市近郊の各村落に傳はり、益々廣い地域に擴がるやうになつた。最初の間、村には毛皮業者は尠かつた。そしてその毛皮業者等は多數の雇傭勞働者を使つてゐた。勞働賃銀は安かつた。それは、勞働者等が技術を學ぶ爲に傭はれたからである。彼等は技術を學んで了ふと、各地に離散して、自分の小作業場を開き、斯くして現今工業家の大部分を支配してゐる資本の跳梁に好都合な地磐を廣い範圍に準備した。要するに、發生して來た營業の最初の作業場に、雇傭勞働者が極めて多かつたことと、それからこれ等の雇傭勞働者が小經營者に次第に變つて行つたこととは、極めて廣い範圍に亙つた現象であつて、殆んど一般的法則の性質を帶びてゐたと言つてもいゝ。然しながら、斯うした事實から出發して『種々なる歴史的考察に反して……大企業が小企業を呑んで了ふものではなく、小企業が大企業から發生して來るものである』と云ふ結論をなすことは、明かに大なる誤謬である。最初の作業場の規模が大きくなるのは、決して營業の中央集中主義を表示するものでなく、寧ろこれ等の作業場がたゞ一つであると云ふことこの職場に於て有利な營業を學ばうとする地方農民の傾向とで說明される。而して農民の營業

がその舊中心地點から地方村落に普及して行つた經路に就いて云へば、この經路は極めて多くの場合に見ることが出來る。例へば、改革以後の時代に於て、(營業の普及した村落の數に依るも、工業家の數に依るも、また生産の量に依るも)發達した營業中で、著しくその價値を認められたものは、次の如きものである。即ちキムラ村のパウロフ舊錠前製造業と製革製靴業、ブルマーキノ村の金物細工業、モルヴィーチノ村とその地方に於ける製帽業、モスクワ縣内の硝子製造業、製帽業、製革業、クラスノセーリスキイ地方の寶石業などである。『ツーラ市外地帶の七郡に於ける家内工業に就いて』と云ふ論文を書いた著者は、『農村改革後に於ける手工業者數の增加』と、『改革前になかつた場處に於ける家内工業家と手工業者との出現』とを一般的現象と認めてゐる。モスクワの統計もまた同樣の見解を下してゐる。吾人はモスクワ縣内に於ける十種の營業中に五百二十三の家内工業作業場が興つた時代に就いての統計的資料を以てもこの見解を證明することが出來る。

またペルミ市の家内工業記錄も(手工業と家内工業との作業場が八八四も出來た時代に關する資料に依つて)改革以後の時代的特質が、小營業の特に急速な成長であることを表明した。

十九世紀に創設された作業場の數

年代	作業場の總數
十年代	三
二十年代	六
三十年代	一一
四十年代	一一
五十年代	三七
六十年代	一二一
七十年代	二七五
不明年代	一三
以前餘程	四六
	五二三

で、新營業のこの發生經路を更に詳細に一瞥するのも、興味あることである。

ウラヂーミル縣内に於ける毛織物並に半絹織物の製造業は、近く一八六一年に起つたものである。最初この製造業は、陰密な營業であつたが、次第に各村落にも紡絲を賣り出す『仲介人』が現はれるやうになつた。最初の『工場主』の一人は、もとは碾麥をタムボフ縣やサラトフ縣等の曠原地方に於て買ひ集めて、それを賣つてるたものである。所が、鐵道が敷設されると同時に穀物の價値は、平均され、穀物賣買は、大金滿家の手に握られるやうになつた。で、例の商賣人は工業的織物業に自分の資本を使用する決心をした。彼は工場へ入つて、仕事を覺へて、『仲

介人』に變つた。斯く或る地方に新『營業』が組織された動機は、國内に於ける一般經濟的發達が、資本を商業から驅逐して、これを工業に振り向けたことである。(註。エム・イ・トゥーガン・バラノフスキイは、ロシアの工場の歴史的運命を研究したその著書に於て、商業資本が大工場組織の歴史的必然的條件であつたことを指摘した。)吾人の引例した營業の研究者は、その紹介した場合が決して唯一のものでないことを示してゐる。即ち陰密な營業を以て生活してゐた農民等は、『有りと凡ゆる營業の先驅者で、その技術的智識を自分の村へ傳へ、新らしい勞働力を惹きつけて、これを活動せしめ、營業に依つて仕事場所有者や職人の獲得する昔噺のやうな利益に就ての物語をして、富裕な百姓達に企業熱を起した。金錢を壺の中に納めたり、或は穀物の賣買に從事したりしてゐた富裕な百姓は、この物語に注意を拂ひ、工業的企業に取りかゝつた(Ibidem)。ウラヂーミル縣アレクサンドロフスク地方に於ける製靴業と漂布業とは、或る場處では斯う云ふ風に起つて來た。即ち、キャラコ織場や或は小配給事務所の經營者等は手織業の衰微を見て、他の製造職場を造り、仕事を監視させ、そして子供達に仕事を教へる爲に、時には職工を雇つた。大工業が或る製造業から小資本を驅逐するに從つて、この資本は他の製

造業に向ひ、その方面に於て他の製造業に發達の刺戟を與へるのである。

田舍に於て小營業の發達を促した改革以後の時代に於ける一般的事情は、モスクワ營業研究家達に依つて浮刻のやうに極めて明瞭に特質を決定されてゐる。レース業に關する記錄を見ると、斯んなことが書いてある。『一方、此間に於て農民の生活事情は、著しく不良となり、他方、住民の――住民中に於て更に好都合な事情にある部分の――需用は著しく增大した。』斯う云つてこの筆者は、その採用した範圍に於ける資料を基礎として、馬を所有せず、農業を營まぬ農民の數の增加が、多數の馬を所有してゐる農民の數の增加及び農民の所有する家畜總數の增加と正比例してゐることを立證してゐる。斯くして、一方『餘分の勞銀』を必要とし、營業的仕事を求める者の數が增加すると同時に、他方小數の富裕な家族は、その富を增し、『貯蓄』を作り、『勞働者を自由に雇傭し、或は家內勞働を貧しい農民に別け與へる可能を得た。』更に筆者は說明して『斯う云つたからとて、吾人は無論因業者だとか、吸血鬼だとか云ふやうな人々が斯うした家族の間から出て來る場合を言はうとするのではない。たゞ單に農民中に於ける極めて普通の現象を觀察したに過ぎないのである。』と言つてゐる。

それ故地方の研究家等は、農民生活の瓦壞と農民の小營業の成長との間に關係連絡があることを指摘してゐる。これも全く理解出來ることである。第二章に述べた資料から考へると、耕作する農民生活の瓦壞は、農民の小營業の成長に依つて補はるべきものであることや、原料精製の模樣は、自然經濟の衰微に伴ひ、相次いで特別な一種の工業に變つて行くことが分る。農民のブルジョアと農村のプロレタリアートとの發生は、農民の小營業の生産品に對する需用を廣め、同時にこの營業に自由な勞働力と自由な資力とを供給するものであつた。(註。營業の資本主義化に就てのエヌ氏の議論に於ける根本的理論的誤謬は、商品製造業と資本主義との順次的階程の第一歩を無視してゐる點にある。エヌ氏は『國民製造業』から『資本主義』へ直接飛び越へ、資本主義は根底なき人爲的なものであることが分つたと云つて、無邪氣に驚愕してゐる。)

こん度は工業上に於ける小商品生産者等の間に錯綜してゐる社會的經濟的關係の如何なるも

九　小商品生産者の解體。モスクワ縣家内工業家戸別記録の資料

のであるかを瞥見する。この關係の性質を決定する問題は、先の第二章に於て小耕作者に關して提起された問題と同種類である。が、こん度は吾人は農業經濟の分量の代りに營業經濟の分量をその基礎としなければならない。小工業家等をその製造量に從つて分類し、各部類に於ける雇傭勞働の役目や技術狀態等を討檢しなければならない。(註。ワルゼル氏はチェルニーゴフ縣に於ける家內工業を紹介する際に、經濟單位の多樣性を立證して、『一方には五百留乃至八百留の收入を有する家族があるかと思へば、他方には殆んど乞食の如き生活をしてゐる家族がある。』斯の如き事情の下に於ては、事業の戶別記錄を作り、事業の平均タイプを定め、これを定數に分類することが、家內工業家等の經濟狀態の全景を示す唯一の方法である。その他のものは、皆偶然的印象の空想か、でなければ各種の平均標準を基礎として數學的に計算した机上の空論である、と言つてゐる。)

斯の如き分解の爲に必要な家內工業家等の戶別記錄を吾人はモスクワ縣について有つてゐる。(註。營業が少ない爲に『ウラヂーミル縣に於ける工業』中にも、斯の如き報告が揭載されてゐる。吾人は本章に於て營業のみの考察に止めよう。その營業に於て、小商品生產者等は、

市場の爲に働いてゐる。――少くとも非常に多くの場合に於て買占人の爲に働くのではない。買占人相手の仕事は、極めて復雜な現象であつて、吾人は特にそれを後段に於て一瞥する。買占人を相手として働く家内工業家族の戸別記錄は、小商品生産者間の關係を判斷する資料とはならない。）研究家等は、製造業に就いて、時には各個の家内工業家の耕作に就いて各營業別に作業場設立の時、家族勞働者と雇傭勞働者との數、年生産額、家内工業家等の所有する馬匹の數、土地耕作の方法等に就いて）正確な統計的資料を引用してゐる。この場合、研究家等は何等分類表の如きものを提供してゐない。で、吾人は自からこの表を作らなければならぬ。各種の營業に從事する家内工業家等を、一作業場に對する勞働者（家族勞働者と雇傭勞働者）の數により、時には生産量により、また生産の技術的設備により分類（一は下、二は中、三は上）しなければならぬ。要するに、家内工業家を分類する基礎は、營業のことを書いた時に引用した凡ての資料に應じて決定された。この場合、各種の營業について、家内工業家を分類する爲に各種の基礎を取る必要があつた。例へば、最小の營業に於て、一人の勞働者を有する作業場はこれを下の部類に、三人の勞働者を有する作業場はこれを中の部類に、三人以上の勞働者を有する作

業場は、これを上の部類に屬せしめなければならなかつた。それから更に大營業に於ては、一人乃至五人の勞働者を有する作業場はこれを下の部類に、六人乃至十人の勞働者を有する作業場はこれを中の部類に屬せしめなければならぬと云ふやうな具合であつた。種々なる分類方法を應用せずに、種々な大きさの作業場に就いての資料を各營業毎に示すことが出來る筈はない。斯くして作つた表は、附錄として添へて置いた。（附錄一參照）この表の中には、各營業の家内工業家等が如何なる特長に依つて分類されたかが示されてゐる。各營業に於ける各部類の爲には、作業場と勞働者と（家族勞働者と雇傭勞働者とが共に）生産額と雇傭勞働者を有する作業場と雇傭勞働者との絶對數が擧げられてゐる。家内工業家等の農業の性質を見る爲には、各部類に於ける一主人の有する馬匹の平均數も、勞働者を用ひて土地を耕作してゐる家内工業家（即ち農村勞働者を雇つて間に合せる家内工業家）の割合も擧げられてゐる。表は全部で三七の營業と二、一二八八の作業場と一一、八三三の勞働者と五百萬留以上の生産額とを示してゐる。この中から資料の不完全な爲か或は資料の特殊な性質の爲かで總計中から除かれてゐる四つの營業を除くと、全部で營業が二二、作業場が一一、〇八五、勞働者が九、四二七、生産額が三百四

十六萬六千留となり、この生産額を（二つの營業に就いて）訂正しても——約三百七十五萬留ばかりになる。

三十三の營業全部に亙つて資料を調べる必要は少しもない。それは非常に厄介な仕事であるから、吾人はこれ等の營業を四つの等級に分類した。（一）一作業場に對し勞働者（家族、雇傭共に）平均數一、六乃至二、五を有する産業は九。（二）勞働者平均數二、七乃至四、四を有する營業は九。（三）勞働者平均數五、一乃至八、四を有する營業は一〇。（四）勞働者平均數一一、五乃至一七、八を有する營業は五。斯くして各等級には一作業場に對する勞働者數の互に接近した産業が合せられてゐる。で、以下吾人は營業のこの四等級に就いての資料を論述の基礎とすることに止める。この資料を in extenso（詳細に）引用しよう。（二七頁の表參照）

この表は、家内工業家等の高等部類と下等部類との關係に就いても極く重要な資料を集めてゐる。この資料は吾人がこれからの斷案を作る基礎となるものである。なほ吾人は四つの等級全部に依る總計的資料を、第二章に於て耕作農民生活の瓦壞を圖解したやうに、圖解を以て示すことが出來る。で、作業場の總數、家族勞働者の總數、雇傭勞働者を有する作業場の總數、

營業の等級		絶對數 a.作業場の b.勞働者の c.生産額（留）の	均分の割合* a.作業場の b.勞働者の c.生産額の 部類別 一	二	三	計	a.雇傭勞働者を有する作業場の割合 b.雇傭勞働者の割合** 部類別 一	二	三	計	生産平均額（留） a.一作業場に對し b.一勞働者に對し 部類別 一	二	三	計	一作業場に對する勞働者の平均數 a.家族の b.雇傭の c.總數 部類別 一	二	三	計
第一級（九）	a	831	75	30	13	100	9	19	40	12	243	527	1.010	430	1.28	2.1	3.3	1.9
	b…	1.776	35	37	28	100	1	9	27	11	182	202	224	202	0.02	0.2	1.2	0.3
	c	357.890	32	37	31	100									1.3	2.3	4.5	2.1
第二級（九）	a	348	47	34	19	100	25	43	76	41	791	1.477	3.291	1.484	1.9	2.9	3.7	2.5
	b…	1.242	30	35	25	100	13	25	43	26	350	399	489	415	0.3	0.8	3.0	1.0
	c	516.268	25	34	31	100									2.2	3.7	6.7	3.5
第三級（一〇）	a	804	53	33	14	100	35	95	100	64	931	2.737	8.063	2.503	2.0	2.7	2.3	4.4
	b…	4.893	25	37	38	100	25	59	86	91	324	411	468	411	0.8	3.9	14.9	3.7
	c	2.013.918	20	37	43	100									2.8	6.6	17.2	6.1
第四級（一五）	a	102	38	33	29	100	61	97	100	84	1.919	3.952	12.714	5.666	2.2	2.1	2.1	2.1
	b…	1.516	15	24	91	100	60	81	93	85	331	363	401	381	3.5	8.7	29.6	12.7
	c	577.930**	13	23	64	100									5.7	10.8	31.7	14.8
全等級の合計（三三）	a	2.085	53	32	15	100	21	57	74	40	651	1.756	5.029	1.664	1.8	2.2	9.9	2.2
	b…	9.427	26	35	39	100	20	46	75	51	292	362	421	367	0.4	2.6	9.0	2.3
	c	3.466.006	21	34	45	100									2.2	4 8	11.9	4.5

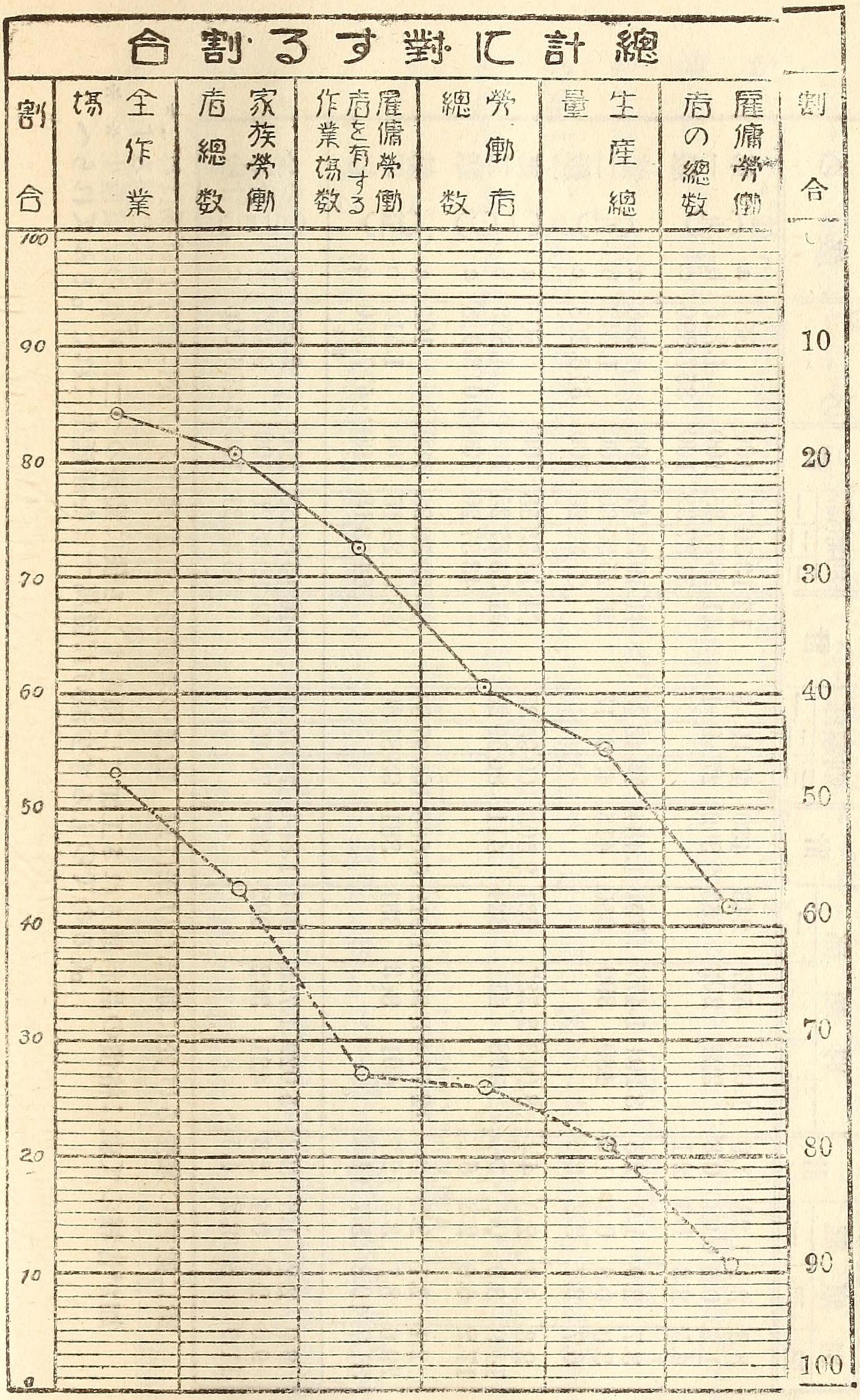
＊これは揭げた等級に於ける作業場並に勞働者の總數・或は揭げた部類に於ける營業の總數に對する割合である。

＊＊生産價額の代りに二つの營業に依る。（生産額には加工される原料品の價格に就ての報告が加へられてゐる。これは生産額が三十萬留だけ減少するものである。）

前掲の表の總計的資料の圖解

……は三十三の産業に依る作業場労働者等の總數に於ける家内工業家の最高部類即ち第三部類の分前を割合を以て示す（上から算へる）

……は三十三の産業に依る作業場労働者等の總數に於ける家内工業家の最低部類即ち第一部類の分前を割合を以て示す（下から算へる）



勞働者(家族及び雇傭共)の總數、生産總額及び雇傭勞働者總數の割合を各部類に就いて決定し、この割合を(第二章に記した方法に依り)圖解を以て示して置く。(表と圖解參照)

で、今度はこれ等の資料から出て來る結論を瞥見する。

雇傭勞働の役目から始める。三十三の營業に就いて云ふと、雇傭勞働は家族勞働より優勢である。即ち勞働者總數の五一%は、雇傭勞働者に屬するからである。この割合は、モスクワ縣の『家内工業家』に取つては、まだ實際より低いくらゐである。吾人はモスクワ縣に於ける五十四の營業に依る資料を計算して、雇傭勞働者の確實な數を調べて見ると、勞働者二九、四四六人の中で雇傭勞働者は一七、五六六人であつた。即ち五九・六五%である。ペルミ縣に於ては、家内工業家と手工業者の兩者全體中に於ける雇傭勞働者の割合は、二四・五%で、たゞ商品生産者だけの中に於ける雇傭勞働者の割合は、二九・四乃至三一・二%である。然しながら、この總括的な數字は、後でも述べるつもりであるが、啻に小商品生産者ばかりでなく、更に資本主義的粗工業をも網羅したものである。從つて極めて興味あることは、雇傭勞働の役割が、作業場の擴張と並行して高まつて行くと云ふ結論を得ることである。これは或る等級を他の等級に比

較した場合にも、同一等級中の様々な部類を比較した場合にも認められる。作業場の規模が大きいだけ、それだけ雇傭勞働者を有する作業場の割合も高く、雇傭勞働者の割合も亦高い譯である。民衆派なる經濟主義者等は、『家内工業家』間では、特に家族勞働者を有つた小作業場が優勢であると言つて安心するのが普通であるのみならず、その主張を證明する爲に屢々『平均』數字を引用する。所が、既に前述の資料に依つても分る如く、この『平均』數字は、現象のこの點の性質を明瞭にする爲に役立たない。家族勞働者を有する小作業場の數字的優越は、小商品生産の大勢が益々多く雇傭勞働者を用ふることに、即ち資本主義的職場の設置に傾きつゝあると云ふ根本的事實を決して排斥するものではない。のみならず、引用した資料は、民衆派の主張する可成り傳播した他の說をも、即ち『家内工業的』製造業に於ける雇傭勞働は、本來家族勞働の『補充』を成してゐるもので、利得の目的で雇傭勞働に走るのではないと云ふ主張をも反駁するものである。實際、小工業家の中に於ても——丁度小農業家の中に於けるが如く——雇傭勞働使用の成長は、家族勞働者數の增加に並行するものであることが分つた。吾人は多くの營業に於て、一つの作業場に對し家族勞働者の數が增加して行くに拘らず、雇傭勞働の使用が、下

等な部類から高等な部類へと次第に增大されてゐるのを見る。雇傭勞働の使用は、『家內工業家』の家族的人員に於ける差異を拭ひ去るものではなくして、寧ろこの差異を强めるものである。圖解は產業のこの一般的な特色を明瞭に示してゐる。即ち高等な部類は、より十分に家族勞働者に依つて安全にされるに拘らず、更に多大の雇傭勞働者を集めてゐる。斯くして『家族的協業組織』は、資本主義的協業組織の基礎となる。然しながらこの『法則』が、たゞ最も小さい商品生產者にのみ、即ち資本主義の萠芽にのみ關するものであることは勿論である。この法則は、農民階級が小ブルジョアへ轉化しようとする傾向にあることを證明するものである。可成り大多數の雇傭勞働者を有つ職場が一度組織されるや、『家族的協業組織』の意義は、當然下落すべきものである。實際、吾人の資料に依つて見ても、前記の法則が高等な等級の最も大なる部類に適用されるものでないと云ふことは、吾人も之を認めてゐる。『家內工業家』が、十五人乃至三十人の雇傭勞働者を有する眞の資本主義者に化す時には、その職場に於ける家族勞働の役目は下落して、極めて微々たるものとなる。(例へば、高等等級の高等部類に於ては、家族勞働者は勞働者總數の七%を示すに過ぎない。) 換言すると、『家內工業的』營業が小規模のも

のであつて、その家内工業的營業に於て主要な役目を演じてゐるものが、『家族的協業組織』であるだけ、それだけこの家族的協業組織は、資本主義的協業組織の最も確實な萠芽となつてゐるのである。從つて此處に極めて明瞭に現はれて來るのは、商品生産の辯證法である。即ち、『自分の手の勞働に賴る生活を』他人の勞働を利用することに基礎を置いた生活に變へることである。

勞働の生産力に關する資料へ移る。各部類に於て、一人の勞働者の負擔する生産額に關する資料は、作業場の規模が擴大されるに從つて勞働力の生産率も高上することを示してゐる。これは大多數の營業に於ても、また營業の例外なき凡ての等級に於ても見られる所である。圖解は明かにこの法則を說明して、生産總額の大部分は、高等部類の負擔する所であるが、勞働者の總數に於ける高等部類の負擔は、更に少いことを示してゐる。所が、下等部類に於ては、この關係は反對である。高等部類に屬する作業場に於ては、勞働者一人當りの生産額は、下等部類に屬する作業場に於ける勞働者一人當りの生産額よりも二〇%乃至四〇%だけ高い。尤も、大作業場は普通もつと繼續的な勞働期間を有つてゐる。そして時としては大作業場は小作業場よ

りも更に高價な材料に加工することがある。然しこれ等二つの事情は、大職場に於ける勞働の生産力が、小職場に於ける勞働の生産力よりも遙かに高いと云ふ事實を排斥し得るものではない。（註。吾人の表に入つてゐる剝合せ工業に依ると、種々なる規模の作業場に於ける勞働期間の繼續に關する資料がある。吾人が既に前述した所で分る如く大作業場に於ける一勞働者の同一期間の生産量は、小作業場に於けるより多い。）それは當然なことである。大作業場は小作業場より三倍乃至五倍多く勞働者（家族雇傭共に）を有してゐるが、更に廣い範圍に於て協業組織を適用することは、勞働生産力の向上に影響しない譯に行かない。大職場は、技術的關係に於て、必ずその設備が良く、優良な器械器具、道具、機械及びその他の物を備へてゐる。例へば刷毛製造業の『正式に設備された職場』では、十五人以内の勞働者がなければならず、鈎製造業では九人乃至十人の勞働者を要する。玩具製造業では、家内工業家の大多數は、玩具を乾燥させる爲に普通の暖爐を用ひ、更に大きい玩具製造業になると、特別の乾燥用暖爐を有し、最大の玩具製造業になると、乾燥場として特別の建物を有つてゐる。金屬製玩具の製造では、十六人の經營者中八人迄は、特別の職場を有つてゐる。これを部類別にすると（一）六人

に〇、(二) 五人に三、(三) 五人に五と云ふ割合になる。鏡製造業者並に額縁製造業者の間では、一四二人の中に一八の特別職場がある。これを部類別にすると、(一) 九九人に三、(二) 二七人に四、(三) 一六人に一一の割合になる。飾製造業に於ては、手編 (一部類) が行はれてゐるが、機械織 (二及び三部類) もある。仕立職に於て、經營者一人に對する裁縫機械數を部類別に擧げると、(一) 一・三、(二) 二・一、(三) 三・四と云つた具合である。イサーエフ氏は家具製造業の研究に於て、この事業を個々別々に經營することは、次の如き不利益を伴ふものであることを立證してゐる。即ち、(一) 個々別々の經營では器具類を完全に有つことが出來ないこと。(二) 製作された商品の範圍を狹めることと。それは、大量生産物は、百姓小舍の中に入りきれないからである。(三) 原料を小賣で遙かに高く (三〇%乃至三五%高く) 買はなければならぬこと。(四) 一面『小家内工業家』に對する信用がない結果、他面小家内工業家が金に窮する結果、商品を安く賣らねばならぬ必要があること。(註。小生産者は勞働時間を伸したり、勞力を緊張させたりして、これ等の不利な事情と闘つてゐる。小生産者は商品製造を營む場合、農業に於ても工業に於てもたゞ需用低下の手段となるのみである。)これと全く同樣の現象は、た

だ家具製造に於てばかりでなく、幾多の農民の營業に於ても認められるものである。尤も、附け加へて置かなければならぬことは、一人の勞働者に依つて製造される製品の價格は、多くの營業に於ては、低級部類から高級部類へ移るに從つて增大されて行くのみならず、更に小營業から大營業に移る場合にも矢張り增大されて行くものだと云ふことである。第一等級の營業に於て、一人の勞働者は平均二〇二留の生産をする。第二、第三の等級に於ては、四〇〇留、第四等級に於ては、五〇〇留以上の生産をする。(上述の理由に依り、三八一と云ふ數字を一倍半だけ增さなければならない。)この事情は、原料品の騰貴と小作業場を大作業場が壓迫する經路との間に連絡があることを示すものである。資本主義社會が一歩發達する毎に、材木等の如き産物の騰貴が必ず之に伴つて來る。斯くして資本主義社會の發達は、小作業場の滅亡を促進するのである。

以上の事實から、農民の小營業に於ても大なる役目を演じてゐるものは、比較的大きい資本主義的作業場であると云ふ結論が生れて來る。この資本主義的大作業場は、作業場の總數から云ふと、可成り少數であるが、勞働者の總數から云ふと、極めて多數であり、生産總額から云

ふと、更に多額の割合を集めてゐる。例へば、モスクワ縣内三十三の營業に依ると、高級部類に屬する作業場の十五%が、生産總額の四十五%を集めてゐる。下級部類に屬する作業場の五十三%は、僅かに生産總額の二十一%を占めてゐるに過ぎない。從つて、營業からの純收益の配當は、まだ比較にならぬ程少なく均等されてゐる筈である。一八九四年乃至五年のペルミ家内工業記錄の資料は、明白にこれを語つてゐる。最も大規模な作業場を七つの營業に分類して見ると、大小作業場の相互關係は、次の如き狀態を呈する。

作業場の數	勞働者の數			總收入		勞働賃銀		純收益	
	家族勞働者	雇傭勞働者	計	總額	勞働者一人に付	總額	雇傭勞働者一人に付	總額	家族勞働者一人に付
				ルーブル		ルーブル		ルーブル	
作業場全部	七三五	一●五八七	八三七	二●四二四	一三九●八三七	八●九八五	三四●五	六九●〇二七	四三
大作業場	五三	六五	三三六	四〇一	二七●八七〇	一六●二一五	四八●二	二六●五二九	三四六
其他の作業場	六八三	一●五二三	五〇二	二●〇〇三	三●九六七	二●七七〇	二五●四	四五●四九八	三〇●五

大作業場の僅かな一小部分は、（作業場總數の十分の一以下）勞働者總數の五分の一くらゐを有つてゐて、全生産の殆んど半ばと全收入（勞働者の勞働賃銀と經營者の收入とを合算し）の五分の二ばかりを占めてゐる。小經營者等の得る純收益は、大作業場に於ける雇傭勞働者の勞働賃銀にさへ遙かに及ばない。吾人が既に他の場所に於て詳細に示した如く、斯の如き現象は例外を成してゐるのではなく、農民の小營業に取つての一般的法則なのである。（註。本文に引用した資料に依つて見ると、農民の小營業中大規模な、そして有力な役目を演じてゐるものは、一千留以上の生産額を有する作業場であることが分る。斯の如き作業場は、我國に於ける政府筋の統計では『工業と製造所』との數に加へられてゐたし、今でも矢張りその中に加へられてゐる。であるから、若し吾人が我國民衆派の行詰りとなつてゐる流行の傳統的術語を利用することを經濟主義者に許してもよければ、吾人は當然次の如き『法則』を規定しなければならない。即ち農民の『家内工業的』作業場中に於て有力な役目を演じてゐるものは、政府筋の統計が不完全な結果、この統計中に入つてゐない『工場と製造所』とであると云ふ法則を規定しなければならない。）

吾人はその集めた資料から流れ出る結論の要點を述べると同時に、農民の小營業の經濟的組織は、典型的な小ブルジョア組織である、既に小農民の中に於て立證したやうな組織であると言はなければならない。農民の小營業の擴張と開發と改良とは、現今の社會經濟的雰圍氣に於て行はれ得るものではない。これを行ふには、一方少數の小資本家と他方多數の雇傭勞働者若くは雇傭勞働者よりも一層困難で悲慘な生活をしてゐる『獨立した家内工業家』とを區別するより他に仕方がない。從つて吾人は農民の最小營業中に、資本主義の――様々な經濟主義者等、マニーロフ一派が『國民的生產』から引離されたものとして描いてゐる資本主義の最も明かなる濫觴を認める。國内市場理論の見地から云つても、吾人の集めた事實の價値は、決して微細なものではない。農民の小營業發達の結果は、より多く資產のある地主等が、生產資力と農村プロレタリアートの中から拔き取つた勞働力とに對する需用を擴大することとなる。農村に於ける職人と小工業家との使用する雇傭勞働者數は、たゞペルミ縣だけでさへ六千五百に算するくらゐであるから、ロシア全體を算へると、可成り有力な數に達するに相違ない。

五　單純なる資本主義的協業

小商品生産者等が比較的大なる職場を組織することは、それ自體更に高級な工業形態へ移ることである。單純な資本主義的協業は、細分された小製造業から發生して來る。『資本主義的生産が、實際に開始される時期は、同一の個人的資本が、勞働者の多數を同時に占有する時である。從つて勞働の過程は、その範圍を擴張し、生産品を多量に製出する。で、多數の勞働者が、同時に、同一場處に於て、(或は勞働の同一方面に於て、と言つてもいゝ。)同一等級の商品を生産する爲に、同一資本家の指揮の下に働くことは、歴史的にも論理的にも資本主義生産の出發點をなしてゐるのである。例へば、その生産方法の點から言ふと、粗工業の如きは、その最初の形態に於ては、手工業者組合的生産と殆んど異つてゐない。たゞ前者は同一資本に依り多數の勞働者を同時に占有してゐるだけのことである。』(『資本論』第一卷第二冊三二九頁)

從つて資本主義のこの出發點は、我國に於ける農民の(『家内工業的』)小營業にも見ることが出來る。その他の歴史的事情は、(組合的手工業が興つてゐないとか、或はその發達が微々たる

ものであるとか云ふやうな事情。）たゞ同一の資本主義的關係表現の形態のみを變化するに過ぎない。資本主義的職場と小工業家の職場との差異は、最初はたゞ同時に占有されたる勞働者の數にあるだけである。それ故に、最初の資本主義的作業場は、數の上では少く、幾多の小作業場中に混じて目立たない。然しながら多數の勞働者を使用することは、生産そのものを漸次變化し、漸次改造する結果に必ず到達する。原始的な手先に依る技術の場合には、各勞働者間の差異は、（力量、敏捷、技巧及び其他によつて）常に非常に大きいもので、たゞこの理由だけによるも、小工業家の境遇は、極端に不安なものとなる。それが更に市場動搖の影響を受けると極めて困難な形態を帶びる。作業場に幾人もの勞働者がある場合には、勞働者間の個人的差異は、既に職場そのものの中に於て消されて了ふ。『同時に占有された大多數の勞働者の綜合的勞働時間は、それ自體既に社會的な平均勞働時間となる。』そしてこれに依つて資本主義的職場生産品の生産と販賣とは、非常な確實性と堅實性とを帶びる。建物、倉庫、器械、勞働用具及び其他の器物を更に完全に利用する可能も現はれる。而もこれはより大きい職場に於ける生産價値を低下させる。（註。例へば、ウラヂーミル縣の金箔職人に就き次の如き記錄を見る。『勞働者

の數が多い場合には、經費に著しく削減を加へることが出來る。削減し得る經費は、燈火費治療費暖爐費器具費等である。』ベルミ縣の銅器製造業に於て、單獨經營の爲には、器械（十六等級の）を完全に準備する必要がある。二人の勞働者の爲には『極めて些少の追加が必要である。』……『六人乃至八人の職場に取つて一揃の器械は、三倍乃至四倍に增加されねばならぬ。磨臺は八人の職場の爲にも、矢張り一臺にきまつてゐる。』固定資本は大職場では四六六留、中職場では二九四留、小職場では八〇留に算定されてゐるが、製產額は六、二〇〇留——三、六五五留——八七一留と云ふ割合である。つまり、小作業場に於ける生產量は、固定資本額の十一倍に、中作業場に於ては十二倍に、大作業場に於ては十四倍になる譯である。）

更に廣い範圍に於て生產を行ひ、多數の勞働者を同時に占有する爲には、非常に多額の資本金を蓄積する必要がある。而もその資本金は、多く生產の範圍に於てゞなく、寧ろ商業及びその他の範圍に於て形造られるものである。この資本の大きさは、經營主が直接企業に關與する形式を定める。即ち若し經營主の資本がまだ極めて小さい場合には、彼自身勞働者として自分の企業に參加するか、或は直接の勞働をせずに、專門的に商業的企業的に働くかする。例へば

家具製造業に就いて次の如く書かれてゐる。『工場經營主の立場は、その勞働者の數と關連して考へることが出來る。二三人の勞働者は、經營主が勞働者と共に働く爲に僅かの餘地を與へる。……勞働者が五人になると、經營主は或程度まで直接の勞働から遁れて、幾分懶ける。そして主に經營者としての二つの最後の役目(即ち材料を買入れ、商品を賣捌くこと)を果すことになる。』『若し勞働者の數が、程なく十人に達するか、或はこの數字を超過すると、經營主は直接の勞働を棄るのみか、殆んど勞働者の監督さへも止める。即ち彼は勞働者の監視をする職工長を置く。斯うなると、彼は最早小資本家であり、『根本的經營者』である。』(イサーエフ著『モスクワ縣内の産業』一の五二―五三)吾人の引用した統計的資料は、この性質を明かに證明して、雇傭勞働者の數が著しく增加して來るに從つて、家族勞働者の數が減少することを示してゐる。

『資本論』の著者は、工業の資本主義的形態の發達經路に於ける單純な資本主義的協業組織の一般的意義に就き次の如く述べてゐる。

『協業組織の歷史的資本主義的形態は、農民經濟と獨立した手工業的生産とに反して――手工業的生産が手工業者組合の形態を有つて居らうが居るまいが、そんなことには關係なく――

發達してゐる……それと同様に、協業組織のお蔭で高められた勞働の社會的生産力が、資本の生産力となるが如く、協業組織そのものも、分裂し獨立した勞働者若くは小經營主の生産過程に反して、資本主義的生産過程の專門的形態となる。これは、勞力が資本に從屬してゐる結果、勞働過程自體が經驗する所の最初の變化である。同一の勞働過程に於て、多數の雇傭勞働を同時に使用することは、この變化の條件であると同時に、資本主義的生産の出發點ともなつてゐる。……それ故に、一方若し資本主義的生産方法が勞働過程を社會過程に變へる爲の歷史的必然であるならば、他方勞働過程の社會的形態は、この勞働過程を資本の生産力向上の方法として最も有利に利用せんとする資本家の常套手段である。

協業組織は上述の單純なる形態に於て、廣い範圍に於ける生産と合致するものであるが、然し協業組織は資本主義的生産發達の特別時代の堅固なる特質的形態と云ふやうなものを形造るものではない。協業組織が若し粗工業の手工業的濫觴に於て、殆んどこれに近いやうな役目を演ずるとすれば、もうそれが關の山である。』(『Das Kapital』I², 344—345)

更にこれから述べる所に依つても、ロシアに於て、雇傭勞働者を有する『家内工業的』小作業

は、遙かに發達し、遙かに廣く傳播された資本主義的形態と如何に密接に結びつけられてるかが分る。農民の小營業に於けるこれ等作業場の役目に就いて言へば、既に前にも統計的に示した如く、これ等の作業場は、以前の生産分裂に代つて、極めて廣い範圍に於ける資本主義的協業組織を造り、更に勞働の生産力を著しく高めるものであると言はなければならぬ。

資本主義的協業組織は農民の小營業に於て大なる役目を演ずるもので、進歩的價値を有つてるると云ふ吾人の結論は、農民の小營業に於ては『勞働組合的原理』の方がより多く現はれてると云ふ廣く傳播された民衆派の議論と、全然相背馳するものである。實際、その反對に、小工業(手工業も)の特長は、生産者等の分裂の甚だしいことである。民衆派の文献は、反對の見解を肯定する爲に、唯一の實例を持ち出す以外に何ものをも提出することが出來なかつた。而もその實例の大多數は、全く協業組織に關するものではなく、寧ろ原料品を協同で買つたり、協同の職場を建てたりする爲に大經營主や小經營主等が一時的微細畫的に團結することに關するものである。斯の如き相互組合は、資本主義的協業組織の優れた價値を毫も毀損するものではない。(註。吾人は本文に於て述べたことを例證する必要を認めない。必要があれば、ヴェー・

ヴェー氏の著書『家内工業に於ける相互組合』中から幾らもその實例を擧げることが出來る。ヴォールギン氏は既にヴェー・ヴェー氏の引證した實例の眞の價値を解剖して、我國の『家内工業』に於ける『相互組合制度』の憐むべき狀態を示した。で、此處にはたゞヴェー氏の左の如き議論を紹介するに止めよう。『……獨立した幾つかの家内工業家を一つの生産單位に結合することは、競爭條件に依り熱心に喚起されるものではない。それは多くの營業に、雇傭勞働者を有する多少大なる職場がないことに依つても證明される。』無論、斯の如き總括的議論を口先だけで持ち出すことは、この問題に就いて存在する正確な戸別記録による資料を解剖するより遙かに容易である。）『相互組合の原理』が如何に實際に適用されてゐるかと云ふことに就いて正確な考察を組み立てる爲には、其處此處から持つて來た實例を引證するだけは不十分である。これが爲には、綿密に調査された或る地域から資料を取つて、協業組織の樣々な形態の比較的な傳播力と價値とを研究する必要がある。例へば、一八九四年乃至五年のペルミで『家内工業』記録中の資料の如きそれである——吾人も既に他の場處に於て（『人口調査書』一八二頁乃至一八七頁）この記録が、小工業家の驚くべき分裂を立證したことや、極めて小數の大作業場

の價値が、極めて大きいものであることなどを示した。資本主義的協業組織の役目に就いて以上述べた結論は、その基礎を單一な實例に有するのではなくして、各地方に於ける數十の樣々なる營業を網羅する個別的記錄の正確な資料をその基礎とするものである。

六　小營業に於ける商業資本

既に述べた如く、農民の小營業は、多くの場合に於て、特別の買占人を生み出す。この買占人は、生産品を賣捌き、原料品を買集める爲に、專門に商取引に從事し、樣々なる形に於て、小工業家等を自分に服從させてゐるのが常である。で、これからこの現象は、農民の小營業の一般的組織と如何なる關係にあるか、この現象は如何なる價値を有してゐるかと云ふやうなことを考察して見よう。

買占人の經營の根本は、轉賣の目的を以て商品（生産品若くは原料品）を買ふことにある。言葉を換へて云へば、買占人は商業資本の代表者である。工業資本と云はず、商業資本と云はず、凡ての資本の出發點となるのは、各個人の手中に自由資金を造ることである。（自由資金と

云ふのは、個人的需用の爲に使用する必要のない資金である。）我國の農村に於て、この資産的分立が如何にして生ずるかと云ふことは、耕作する農民社會と營業に從事する農民社會との分裂に關する資料を基礎として、既に詳細に前述した通りである。買占人の出現の動機となつた事情の一は、即ち小生産者の分裂と離隔とそれから小生産者間にある經濟的差異と爭鬪とは、この資料に依つて明瞭にされてゐる。他の事情は、商業資本のなす作用の性質に關するものである。即ち製品の販賣と未加工品の購入とに關するものである。商品生産の發達が極めて微々たる時代には、小生産者は土地の小市場に於て、製品の販賣をなすくらゐが關の山である。何うかすると、直接需用者の手に賣り渡すこともある。これは、僅かに手工業を脱した商品生産發達の下級階程である。所が、市場が擴張されるに伴れて、斯の如き小さい部分的な販賣は、（小さい部分的生産と完全に一致してゐる所の）不可能になつて來る。大市場に於ける販賣は、多量的、大量的でなければならぬ。そこで、小規模の生産は、多量的、卸賣的販賣の要求に對し和し難き矛盾に陷る。この矛盾は、前述の如き社會的經濟的事情の下にある場合、小生産者が孤立し、分解しつゝある場合、裕福なる少數者の代表者が販賣をその一手に引受け、販賣の

中心を作ることに依つて解決するより他に方法はない。買占人は製品を(或は原料品を)大量的に買ひ占めると同時に、斯くして販賣費を安くし、偶然的反則的小量販賣を正則の大量販賣に變へた——この純經濟的な大量販賣の必然的結果として、小生產者は市場から遮斷せられ、商業資本の威力に對して全く孤立無援となつた。斯くして商品生產事情の下では、小生產者は必然的に商業資本の支配下に、細分された小量販賣に對する多量大量販賣の純經濟的支配力の下に陷るのである。(註。資本主義の發達に於ける商業商人資本の意義に關する問題に就いては、『資本論』の第三卷を讀んで貰ひたい。商品的商業資本の本質に就いては、III, 1, S,253—254 を、商業資本に依り販賣の安價にされることに就いては、S. 259 を、集中主義が工業の職場に於てより寧ろ商業的企業の方に先に現はれる現象の經濟的必然性に關しては、S. 278—279 を、生產の資本主義的手段發達の爲に必要な條件としての商業資本の歷史的役目に關しては、S. 310—311 を讀んで貰ひたい。)從つて買占人の利益が、實際上に於ては、屢々大量販賣の價格と小量販賣の價格との差額にのみ制限されてゐないことは、勿論である。それは恰も工業に從事する資本家の利益が、屢々正常な勞働賃銀を更に割引くことから成り立つてゐるやうなものである。

のみならず、工業資本の利益を説明する爲には、吾人は勞働力がその實際の價格に應じて賣られるものであると云ふことを承認しなければならない。これと同樣に、買占人の役目を説明する爲に、吾人は生産品の購買は、買占人により商品交換の一般法則に依つて行はれてゐると云ふことをも承認しなければならない。たゞ商業資本の支配力のこの經濟的原因のみが、樣々な形態を諒解する鍵を與へ得るのである。商業資本は、實際上さうした形態を採る。そしてこの形態の中に於て、極めて多くの惡計が常に仕組まれるのである。(これは毫も疑ふ餘地がない。)その反對に行くことは——普通民衆派がなす如く——即ち、『因業者』の種々なる詭計を指摘することに滿足して、この立場から現象の經濟的本質の問題を全く排斥して了ふことは、鄙俗な經濟的見地に立つことを意味するものである。(註。前述の如き民衆派の見解は——彼等は家内工業を理想化し、商業資本を一種の悲しむべき過失と言ひ、市場相手の小營業の必然的屬性と認めない——遺憾ながら、統計的研究の上にも反映されてゐる。現に、吾人は家内工業家の戸別記錄を澤山に有つてゐるが、『モスクワ、ウラヂーミル、ペルミ諸縣の』戸別記錄は、小工業家各個の經營狀態を正確に研究したものであるが、買占人の營業狀態に關する問題や、小工業

家の資本は如何に蓄積されて行くものであるかと云ふ問題や、この資本の大きさは何に依つて定められるかと云ふ問題や、買占人に取つての購買價格は、何んなものであるかと云ふ問題を見遁してゐる。）

市場相手の小生産と商業資本の支配力との間の必然的因果關係に就いての吾人の議論を立證する爲に、買占人は如何にして現はれるか、彼等は如何なる役目を演じてゐるかと云ふことを最も良く紹介したものが種々ある。で、その一つを更に詳細に研究して見ることとする。吾人の主眼とする所は、モスクワ縣に於けるレース製造業の研究である（『モスクワ縣の工業』第六卷、第二版、）『女商人』發生の經路は斯うである。一八二〇年代に於て、即ち營業の發生時代に於て及びその後レース編の女工がまだ少なかつた時代に於て、レースの主なる購入者は、地主達、即ち『旦那達』であつた。需用者と生産者とは、非常に接近してゐた。このレース製造業が擴まるにつれて、農民等は『幸便があり次第』、例へば、櫛商人の手を經て、レースをモスクワへ送り出すやうになつた。然し斯の如き原始的販賣方法の不便は、早速現はれた。『此の仕事に從事しない百姓が、戸別に歩き廻つても、何の役にも立たないからである。』で、レース編をする女

工の一人に販賣方を依賴し、その消費した時間に對して報酬をするやうになつた。『彼女はレース編の材料を持ち込んで來た。』斯くして部分的販賣が不便な結果、レース商賣は多くの女工から製品を集める一人物に依つて行はれ、特別營業に分離するやうになる。これ等の女工は互に家長的親近關係(親類、隣人、同村人及びその他の關係)にあるので、最初は販賣の協同機關を作らうと試み、女工中の一人に販賣を一任することを試みるのである。然しながら金錢的經濟關係は、程なく家長關係に破綻を生ぜさせ、農民社會の解體に關する幾多の資料に依り先に吾人が立證した現象に程なく導いて行く。生產品を販賣の爲に生產すると云ふことは、時間に金錢同樣の價値を認めることを敎へるものである。從つて費消された時間と勞力との爲に仲介者に報酬する必要が起つて來る。仲介者は自分の仕事に慣れて、これを職業化するやうになる。『斯うした買占旅行が數回繰り返へされると、女商人の一タイプが出來上つて了ふ。』幾度かモスクワへ赴いた者は、其處に常客の取引先を作る。この取引先は規則的な販賣をする爲に必要である。『仲買に依る利益で生活することの必要と習慣とが形造られる。』女商人等は仲買料の外に、『材料や紙や糸をも喰物にしようとする。』一定の値段以上にレース代を取る。女商人等は

これでもまだ一定値段より安いのだから『品物を出さうが出すまいが勝手にするがいゝ』と言ふ。『女商人等は市街から商品を取り寄せ始める。そして此處でも相當の利益にありつく。』從つて女仲買人は獨立した女商人に變る。その女商人は最早販賣を獨占し、女工等を完全に自分に服從させる爲にその獨占權を利用し始める。商業取引と共に金貸取引も現はれる。女工等に金を貸し與へて、彼女等から安い値段で商品を買占める。『娘達はレースを賣ると、一留に就いて十哥宛取られる。のみならず、娘達は女商人がその外にも自分達から何かを取つてゐることを非常によく承知してゐる。即ち女商人は更に高價にレースを賣り付けるのである。然しながら娘達はそれ以外に何う取引をしてよいか、全く分らないのである。彼女等に自から交代でモスクワへ賣りに出かけたらいゝではないかと言ふと、彼女達はさうすれば却つてよくないと答へた。彼女達は誰に賣つていゝか分らないが、女商人は既にその場處を知つてゐるのである。女商人は彼女等の商品を賣り、注文し、布地や模様を指定する。女商人は彼女達に常に前金を渡したり、金を貸したりする。また若し必要なことがあれば、直接斷片を賣り付けることも出來る。一方女商人は最も必要缺くべからざる人間となり、他方彼女は次第に他人の勞力を極端

に利用する人物――女の因業者になる。』之に小生産者からも斯くの如きタイプが形造られることを更に附け加へて置く必要がある。即ち、『誰に問ひ質して見ても、結局女商人達は、皆以前は自分でレースを編んでゐた者で、從つて生産そのものを知つてゐる人物であつた。彼女達はこれ等のレース編の女工から出て來たものである。彼女達は最初は資本と云ふやうなものを少しも有つてゐなかつた。たゞ自分の仲買で金を儲けるに從つて、次第に更紗や其他の商品迄も商ふやうになつたのである。』(註。斯くして小生産者そのものゝ中から買占人が出來ると云ふことは、研究家がこの問題に觸れる毎に殆んど必ず立證する所の現象である。)斯樣な譯であるから、商品生産の狀態の下に於ては、小生産者がその内部から一般的には更に一層富裕な工業家を必然的に出すのみならず、特別な場合には商業資本の代表者をも出すと云ふことは、最早疑ふ餘地がない。(註。コルサーク氏は更に『工業の形態に就きて』に於て、小量販賣の(同じく原料品の小量購入の)損害と『部分的な小量生産の一般的性質』との間の關係を全く正しく述べてゐる。)所が、一度この商業資本の代表者が形造られるが最後、部分的小量販賣は、何うしても卸賣的大量販賣に壓倒されるやうになる。(註。吾人が前に詳述した家内工業家中の大經營主

等は、一部分買占人となつてゐる者が少くない。例へば、大工業家が小工業家から製品を購入することは、極めて一般的な現象である。）『家内工業家』中の最も大なる經營主等が同時に買占人となりつゝ、實際に賣捌きをも營んでゐる實例を左に幾つか掲げる。モスクワ縣の家内工業家等は、商業用算盤の販賣を（表中に於ける商業用算盤に關する統計的資料參照。附錄一。）主に全ロシアに於ける各地の定期市で行ふ。自分自身で定期市に於て取引する爲に持つてゐなければならぬものは、第一に、相當の資本である。何となれば、定期市に於ける取引は、たゞ卸賣ばかりだからである。第二に、自分の雇人を有つてゐて、それに現場で買占めを行はせ、それを商人に送らせなければならない。この事情に滿足を與へるものは、『唯一の商人なる農民である。』彼は相當の資本を有し、算盤の塑作（即ち枠と小骨とから算盤を作ること）とその取引とに從事してゐる『家内工業家』である。『特に商取引をやつてゐるのは、』彼の六人の息子である。それ故自分の土地を耕す爲に二人の勞働者を雇はねばならぬ。そこで、研究家は斯う言つてゐる。『彼が自分の商品を有ちながら凡ての定期市に參加する可能を有つてゐることは、賢明なことではないので、比較的小さい商人等は、その商品を普通近所から賣捌いて行く。』（モスクワ

縣の工業』第七卷、第一版、第二篇、一四一頁。)この場合に於て、商業資本の代表者は、『百姓なる耕作者』の一般大衆からまだ分離せずに、自分の土地經營と家長的大家族とを保存してゐた。モスクワ縣の眼鏡製造業者等は、自分の製品(眼鏡臺)を賣り付ける工業家等に依つて完全に支配されてゐる。之等の買占人は、同時に自分の工場を有つてゐる『家内工業家』である。彼等は製品を『主人』に渡すと云ふ條件で、貧乏人に未製材料を貸し付ける。小工業家等は自からモスクワに於て製造品を賣捌かうと試みたが、それは失敗に終つた。少しづゝ、十留とか十五留とかづゝ賣捌くことは、非常に割が惡いことが分つた。リヤザン縣のレース製造業に於て、女商人等は女工の勞銀に對し十五%乃至五十%の利益を得てゐる。『堅實な』女商人等は、販賣の中心地との間に規則的な取引を開始し、商品を郵送して、運賃を節約する。卸販賣が如何なる程度迄必要なものであるかと云ふことは、商人等が百五十留乃至二百留くらゐの販賣ではその販賣費用を償ひ得ないと思つてゐることでも分る。ベリョーフ市のレース販賣組織は、次の如きものである。ベリョーフ市には、三種類の女商人がある。(一)『女の家畜卸商』である。彼等は小さい注文を分配し、自から女工を訪問して、商品を大商人に卸すのである。(二)女商

人の注文人で、自から注文をなし、或は女の家畜卸商から商品を買占めたり、商品を都市へ運んだりする。(二)女の大商人は、(一三の商店を有つてゐる)仲買人と連絡を取つて、彼等に商品を送り、大注文を受ける。地方の女商人が、自分の商品を大商店へ入れることは『殆んど不可能』である。それは『大商店は様々な編物工場から製品を一纏めに買つて來る卸賣買の買占人と連絡するのを喜ぶからである。』女商人は此の『請負人』に販賣しなければならない。『女商人等は彼等請負人から商賣上の凡ゆる事情を聞く。請負人等は價格を定める。一口に言ふと、彼等を無視しては何うにもならないのである。』

斯の如き實例の數は、幾倍にでも増加することが出來るが、大市場を相手にして生産される場合に、部分的な小販賣は絶對に不可能であると云ふことを見るには、既に引用した實例だけで最早十分である。小生産者等の分裂と彼等の完全な瓦壊とに鑑み、大量販賣はたゞ大資本に依つてのみ行はれるものである。その結果、大資本は家内工業家の境遇をして、孤立無援たらしめ、これを他人の支配下に置くものである。從つて、『販賣機關を組織』して『家内工業家』を援助せよと説く民衆主義者の流行的理論が、如何に下らないものであるかと云ふことも察す

ることが出來る。純理論的方面から云ふと、斯の如き理論は、俗化したユートピヤである。商品生産と資本主義的販賣との間に斷つべからざる連絡があると云ふことを理解しない爲に斯の如き理論が起るのである。(註。『問題は因業者にあるのではなくして、家内工業家の間に資本が不足してゐると云ふ點にあるのである。』とペルミの民衆主義者等は言つてゐるが、因業者とは何か、何故に家内工業家には資本がないのであるか？　民衆主義者等は小生産者の瓦壞經路を研究することを欲しない。この點に問題がある。小生産者瓦壞の經路は、小生産者等から企業家と『因業者』とを吸ひ取つて了ふのである。)

ロシアの現實の資料に就いて言へば、さうした資料は、斯の如き理論の作者に依り單純に無視されてゐる。即ち小商品生産者の分裂も彼等の完全なる瓦壞も無視されてゐる。彼等の中から『買占人』が出來たことも、また出來つゝある事實も、資本主義社會に於て、販賣はたゞ大資本に依つてのみ行はれ得るものであると云ふ事實も無視されてゐる。これ等凡ての不愉快な然し疑ふ餘地なき實際上の諸點を計算に入れずに、in's Blaue hinein（譯者註、無暗に饒舌る意味）出鱈目を云ふことの容易いことは、解り切つた話である。(註。民衆主義者の理論の(似而非なる)經濟的

論據に屬するものは、獨立せる家内工業家の爲に必要な『固定資本』と『流通資本』とが、極めて僅少であると云ふ議論である。極めて一般に廣まつてゐるこの議論の論旨は斯うである。家内工業は農民に大なる利益を齎すものである。從つて家内工業の扶植は望ましいことである。『吾人は破壞されつゝある農民の大衆を、彼等の幾らかを小商品生産者に變ずる方法を以て援助することが出來るかの如きこの滑稽な思想に立止るまい。』然し小工業を植え付ける爲には、家内工業家が事業を經營する爲に必要な『資本』額が、如何に大きいかと云ふことを知らねばならぬ。この種の多くの計算の一を左に掲げる。グリゴーリエフ氏は吾人に斯う教へてゐる。バヴロフスキイ家内工業家の爲に、固定資本は勞働用具の價格を算へて、三留乃至五留、十留乃至十三留乃至十五留を要する。流通資本は一週間の食糧費や未製材料を計算して、六留乃至八留を要する『それ故に、パヴロフスキイ地域に於ける固定資本と流通資本の金額は(sic!)極めて僅かなもので、この地方では獨立せる(sic!)生産業の爲に必要な器械と材料を備へることは、極めて容易である。』實際、斯の如き判斷を『容易に』なし得るものだらうか？　バヴロフスキイのプロレタリアは一筆で『資本家』になつて了つてゐる。バヴロフスキイのプロレタリアの一週

間分の生活費と一文の價値しかない器械とが、『資本』と名附けられてゐる。販賣を獨占し、de facto 獨立し、數千の資本を運轉する所の大買占人の實際的資本を、この實際的資本を著者は單純に取り去つたのである。實にこの裕福なるパヴロフスヤイ人は奇妙である。幾代もの間に彼等は凡ゆる不正を以て數千の資本金を貯蓄し、また貯蓄し續けてゐる。然るに最近の發見に依ると『獨立する』爲には數十留の『資本』で十分であると云ふことが分つた。)

然しながら吾人は此處で我國の『家内工業』に於て、商業資本は如何に現はれてゐるか、商業資本は小工業家を如何なる無援孤立な憐れな狀態に陷れてゐるかと云ふことを詳細に書いてゐる可能を有たない。のみならず、次の章に於て、商業資本が發達の頂點に達した時の、即ち商業資本が(製造業の附帶物となりつゝ)大規模の資本主義的家庭勞働を組織した時の支配力に就いて論ずるつもりであるから、茲には商業資本が小工業に於て取る根本形式を指摘することに止めよう。

最初の最も單純な形式となつてゐるものは、商人が(或は大工場の經營主が)小商品生産者から製品を購入することである。買入の發達が十分でない場合か、或は買占人の競爭が激しい場

合には、商品を商人に賣り附けることは、他の凡ゆる販賣と異らないことがある。が、多くの場合に於て、その土地の買占人は、常に農民の製品を買取つて呉れる唯一の人物である。斯うなると、買占人は自分の獨占的立場を利用して、生産者に支拂ふ價格を法外に下げようとする。

商業資本の第二の形式は、商業資本と卸賣業との結合にある。即ち不斷に金錢の必要に迫られてゐる農民は、買占人から借金をする。次に借金に對して自分の商品を提供する。この場合に於ける(非常に廣く一般的になつてゐる場合に於ける)商品販賣は、常に人爲的に低落させられた價格によつて行はれる。そして家内工業家の手には、雇傭勞働者でさへ得られる程度のものも殘らないことが屢々である。それに、債權者と債務者との關係は、當然債務者が債權者に個人的に支配される結果となる。經濟的隷屬となる。債權者が債務者の窮乏の特別の場合に乘ずる結果となる。

商業資本の第三の形式は、製品に對し商品を以て支拂をすることで、これは田舍に於ける買占人の一慣例をなすものである。この形式の特質は、これが獨り小工業の特質をなしてゐるば

かりでなく、一般に商品生産と資本主義との凡ての幼稚な發達程度の特質であると云ふ點に存する。勞働を普遍的にし、凡ての家長制度から徹底的に分離した大機械精工業のみが、經濟的隷屬のこの形式を壓迫し、大工業的作業場に對する關係から、立法的に斯かる形式を禁ずべしと主張した。

商業資本の第四の形式は、生産の爲に『家内工業家』に取つて必要な物資（未製材料若くは補助材料及び其他）の形を以て行ふ商人の支拂である。生産材料を小工業家に販賣することは、商業資本の獨立的作用をなすものと云へる。それは製品を買占める作用と同様な作用である。若し製品買占人が『家内工業家』に必要な未製材料を以て支拂を始めるとすれば、これは資本主義關係の發達に於ける一大進歩を意味するものである。小工業家と既製品市場との連絡を斷つた買占人は、今や更に小工業家と原料品市場との連絡を斷ち、これを以て家内工業家を完全に自分に從屬せしめようとしてゐる。この形式から更にも一歩踏み出すと、商業資本の最高形式に達する。即ち買占人が一定の勞銀で製作させる爲に材料を直接『家内工業家等』に分配するのが、この最高形式である。家内工業家は fe facto の雇傭勞働者として、自分の家に在つて資

本家の爲に働くやうになるのである。(註。商業資本の純粹の形式は、商品を買ひ入れて、これを利益を以て賣却するにある。工業資本の純粹の形式は、商品を買つて、これを製造し、販賣すること、未製材料を買ふこと、材料を製作する所の勞働力を買ふことにある。)茲に於て、家内に於ける資本主義的勞働が形造られるのである。この資本主義的家庭勞働は、小工業に於ては多小稀にしか見られないが、これが盛んに適用されるのは、資本主義の次の如き高い發達程度に於てゞある。

七　『營業と農業』

農民の營業記錄に於ける特別部門に附せられる普通の表題は斯うである。吾人の研究する資本主義の初期階程に於て、工業家は殆んどまだ農民から分離しなかつた。それ故に工業家と土地との關係は、實際上極めて特質的な、そして特別の研究を要する現象となつてゐる。

吾人の表(第一附錄參照)の資料から始める。『家内工業家等』の農業の特質を決定する爲に第一に各部類の工業家の所有する馬匹の平均數に關する資料を茲に引用する。この種の資料を有

つてゐる十九の營業を總合して見ると、一人の工業家（大經營主或は小經營者）に對し、馬匹の一般的平均數は一・四となり、これを部類別にすると、（一）は一・一、（二）は一・五、（三）は二・〇となる。斯くして經營主はその工業經營の程度に依りより高く立つてゐるだけそれだけ農業家としても高く立つてゐるのである。より大きい工業家等は、勞働家畜の量に依ると、殆んど二倍ばかり小工業家より優勢である。然し最小工業家等（第一部類）も、その農業狀態に依ると、農民の平均生活以上である。何となれば一八七七年に於てモスクワ縣による一般的平均數に於て、一農家に就き馬匹〇・八七の割合になつたからである。從つて工業家なる大經營主及び小經營者になる者は、比較的裕福な農民ばかりであつた。農民の貧窮狀態は、主として經營主なる工業家を作らず、寧ろ勞働者なる工業家（家內工業家所屬の雇傭勞働者、出稼勞働者及びその他）を作る。惜しい事には、モスクワに於ける營業の大多數を調べて見ると、營業に從事してゐる雇傭勞働者の農業に就いての報告がない。たゞ例外は製帽業だけである。（第一附錄の表に於ける製帽業に關する資料參照）經營主なる製帽業者と勞働者なる製帽業者との農業に關する極めて教訓的な資料を左に揭げる。

製帽業者の狀態	戸數	一戸に對する畜數 馬匹	牛牝	羊牝	土地の數	以上より 耕作されてゐるもの	耕作されてないもの	戸數 耕作せる戸數 自力にて	雇傭にて	農業に從事せざる戸數	馬匹を有せざる戸數	滯納金（留）
經營主	一八	一・五	一・八	二・五	五二	四六	六	一七	一	一	一	五四
帽子製業者	一六五	〇・六	〇・九	〇・八	三八九	二四九	一四〇	八四	一八	六三	一七	二四〇二
勞働者												
製帽者												

斯く經營主なる工業家等は、極めて『嚴格なる』農業家に、即ち農民ブルジョアの代表者に屬してゐる。然るに雇傭勞働者は、破産した多數の農民中から募集される。(註、製帽業のことを書いた著者が此處でも農業に於ても工業に於ても農民社會の瓦壞しつゝあることを『述べてゐないのは、』注目に値する。凡ての民衆主義者の如く、彼はその結論に於て『營業は農業に從事

する妨げとはならない。』と云ふやうな全く無意味な陣腐な意見を述べて滿足してゐた。社會的經濟的矛盾は、營業の組織に於ても農業の組織に於ても、結局無事に通過して了つた。(二)前記の關係の特質を決定する爲に、更に一層重大なのは、經營主なる工業家等の土地耕作方法に關する資料である。モスクワの研究家等は、土地耕作方法を三通りに區別した。(一)戶主の個人的勞働を以て耕作すること。(二)『雇傭を以て』、即ち自分の農具で『零落した』主人の土地を耕作する者を隣人中から雇入れること。この耕作方法は餘り財產のない破產しつゝある經營主の特質を決定するものである。更に反對の意味を有つのは、第三の方法、即ち『勞働者を以て』、經營主が農業(耕作)勞働者を雇傭することに依つて耕作することである。この勞働者等は、普通一夏を切つて雇はれる。のみならず特に暑い時には、經營主は工場勞働者に農業勞働者の手傳をさせるのが普通である。『斯く農業勞働者を以て土地を耕作する方法は、極めて有利な仕事である。』吾人は表にもこの土地耕作方法に關し十六の營業に就いて材料を集めて置いた。その中七つには『耕作勞働者』を雇はない經營者がない。この十六全部の營業に依ると、農村勞働者を雇つてゐる經營者なる工業家等の割合は、十二%に相當する。これを部類別にすると(一)

「・五%、(二)一六・七%、(三)二七・三%となる。工業家が裕福であるだけ、それだけ彼等の中に農村企業家が多く見られる譯で、從つて營業に從ふ農民社會に關する資料を解剖して行くと、工業と農業とに於ける並行的瓦壞の光景を見ることが出來る。吾人は第二章に於て農業に從ふ農民社會に關する資料を根底として既に同樣の光景を見たのである。

『家内工業家』なる經營主が『耕作勞働者』を雇傭することは、工業の發達した何の縣に於ても極めて一般的に擴まつた現象である。例へば、ニゼゴーロド縣に於ける裕福なる筵職人の如きは、農業小作人を雇つてゐると云ふことを指摘したものを吾人は見る。同縣の毛皮商は、附近の純農村から普通やつて來る農業勞働者を雇つてゐる。製靴業に從事してゐる『キムラ郡の農民なる土地共有團員等は、自分の畑を耕作するのにトヴォール市外地や隣村各地から多數にキムラ地方へやつて來る小作人や女人夫を雇つた方が有利であると思つてゐる。』コストローマ縣の食器塗職人等は、仕事の暇な時にその雇傭勞働者を野良仕事に出す。ウラヂーミル縣の『獨立經營者』なる金箔師等は、『特別の田畑勞働者を有つてゐる。』それ故に彼等自身は『全然耕作することも刈り入れることもし得ないけれども』彼等の畑はよく耕されてゐる。モスクワ縣に

於ても、多くの工業家は、好んで『耕作勞働者』の雇傭に走る。表に資料を掲げた者を除いて例へばピン製造人、フェルト製造人、玩具製造人等は、その勞働者を野良仕事にも出す。藤職人、金箔師、釦製造人、帽子製造人、馬具師などは、農業小作人及び其他を使役してゐる。

この事實――農民の工業家等が農業勞働者を雇傭する事實――の意味は、極めて大きい。この事實は、農民の營業に於てさへ、凡ての資本主義諸國に固有し、そして資本主義の進歩的歴史的役目の肯定してゐる所の現象が、即ち住民の生活標準の高上、住民の要求の向上が現はれるやうになつて來たと云ふことを示すものである。工業家は上から下へ『灰色の』農業家とその家長的狂暴性とを觀察し始め、最も困難なそして勞銀の安い農業勞働を自分の身體から振り落さうとする。資本主義の餘り發達してゐない營業に於ては、この現象はまだ極く微かに現はれてゐるに過ぎない。工業勞働者は農業勞働者から僅かに分離し始めたばかりである。資本主義的工業のその後の發達階程に於ては、この現象は、これから述べて行く如く、到る處に見られる。

『農業と營業との關係』問題は、極めて重大なものであるから、吾人は更にモスクワ縣以外の

他の諸縣に關する資料をもつと詳細に瞥見しなければならぬ。

ニゼゴーロド縣。多くの筵職人の所では、農業が衰微しつゝある。彼等は土地を放棄しつゝある。『荒地』の三分の一ばかりは、冬蒔の畑で、二分の一ばかりは、春蒔の畑である。然し『裕福な百姓』に取つて、『土地はもう極惡な繼母ではなくして、慈愛に滿ちた母である。』即ち家畜は十分にある。肥料もある。土地を賃借りする。自分の地帶を分讓から除外しようと努力する。一層自分の地帶の爲に骨を折る。『かうなると、その兄弟なる金持の百姓は、地主になり、他の貧乏な百姓は、彼の農奴になる。』手良商人等は、『惡い土地耕作者』であるが、此處でもより大きい經營主を區別する必要がある。大經營主等は『貧乏な同村民の土地を賃借りするのである。』種々なる部類に屬する毛皮商人の典型的豫算總計を左に掲げる。

資産による家族の部類別	金持	中流	貧家
男女農奴數	一四	一〇	七
男子勞働者數	三	二	二
雇傭勞働者	二	雇入	自から雇はれる
土地（ナーチヤシデ）	一九	一六	六
土地 借用	五	—	—
土地 貸與	—	—	六
收入（留）資源 天然物	二八・八	八八	一五
收入（留）資源 金錢	六九七	一二〇	七五
收入（留）資源 農業	四〇九・八	一三八	五〇
收入（留）資源 毛皮業	五〇〇	七〇	四〇
收入（留）資源 計	九〇九・八	二〇八	九〇
支出（留） 天然物	二二・八	八八	一五
支出（留） 金錢	五〇三	一二四	二一
支出（留） 計	七一五・八	二二二	二六
バランス	一九四	一四	三六
金錢支出の割合	七〇		八八

農業家と工業家との分解の平行線は、この表に完全に明瞭に現はれてゐる。研究家は鍛冶職人に就いて、一方金持の經營主に取つても、他方『水呑百姓』なる勞働者に取つても、『營業は農業より重要なものである』と言つてゐる。

『ウラヂーミル縣の工業』に於て、營業と農業の相互關係に關する問題は、他の研究よりも遙

かに詳細に調査されてゐる。幾多の營業に就いても、一般に『家内工業家』の農業に關してばかりでなく、『家内工業家』の各級各部類、例へば、大經營主、小經營者、雇傭勞働者、仕事場所有者と織物工、工業家なる經營主と他の農民、土地營業と出稼營業に從事する農家等の農業に關しても正確な資料が（上述の凡ての事實に依つて分る如く、斯の如き『平均』數は、全く虚構である。）示されてゐる。この資料に依るハリゾメーノフ氏の一般的結論は、若し『家内工業家等』を三部類に分つならば、即ち（一）大工業家、（二）小中工業家、（三）雇傭勞働者に分つならば、農業が第一部類から第三部類へ惡化し、土地と家畜との量が減少し、『倒潰する』事業の割合が增加する傾向を見ることが出來ると言つてゐる。遺憾ながら、ハリゾメーノフ氏はこれ等の資料を甚だ狹く、而も偏頗に見、農民なる農業家の分解の並行的獨立的過程に注目してゐない。それ故に彼はこれ等の資料中から必然的に流れ出て來る結論に、即ち農民生活は農業に於ても工業に於ても小ブルジョアと農村プロレタリアートとに分裂しつゝあると云ふ結論に到達しなかつた。（註。然し、ハリゾメーノフ氏が斯の如き結論に如何に接近してゐたかと云ふことは、氏が絹織物業に就いて書いた際、改革以後の經濟的發達の特質を左の如く論じたこと

に依つても明かである。『農奴制度は農民の經濟的水準を平均した。農奴制度は金持の農民の手を縛し、貧乏人を支援し、家族の分裂を妨害した。自然經濟は、商工業的活動の舞臺を甚だしく狹めた。地方市場は企業心に十分に廣い天地を與へなかつた。商人若くは工業家なる農民は、金錢を貯蓄した。尤もそれは冒險的にではあるが、然しその代り極めて徐々に貯蓄した。壺の中へ入れた。六十年代から事情は一變して來た。農奴制度は廢止された。紙幣制度と鐵道とは、市場を廣くし、遠くし、企業的な農民の商人と工業家との活動範圍を廣めつゝある。經濟的平均水準以上にあつたものは、凡て急速に獨立し、商業や工業を發展させ、量の上から云つても、また質の上から云つても、その利用範圍を擴大してゐる。この水準以下であつたものは凡て倒壞し、土地なき者、業なき者、馬なき者の仲間へ落ちて行つた。農民社會は因業者と中産者と無産プロレタリアートとに分裂する。農民社會中の因業者の要素は、文明社會の凡ゆる習慣を急速に取り入れる。貴族生活を始める。即ちこの因業者の要素は數の上から非常に大きい階級を、即ちロシア社會の半文明階級を形造る。)從つて彼は個々別々に營業を紹介する場合、一般に『農業』に對する『營業』の影響に關する民衆派の傳統的判斷に、即ち彼自身さへ認め

なければならぬやうな商工業上並に農業上の組織そのものにある深い矛盾を無視する態度に到達することが屢々である。

ウラヂーミル縣に於ける營業の他の研究家なるヴェー・プルガーヴィン氏の如き、本問題に就いての民衆主義的見解の典型的代表者である。彼の議論の要點は、かうである。ポクロフスキイ市外地帶に於ける木綿織物業は、『概して織工の農業生活の有害なる根源と認められぬ。』(原文のまゝ)資料は多數の織工の拙劣な農業に就いて、仕事場所有者の農業が一般水準より遙かに高いことに就いて證明してゐる。表に依つて見ても分る如く、或る仕事場所有者は農村勞働者をも雇傭してゐる。勿論、『工業と農業とは、相提携して進むもので、その發達と發展とは相互關係にある。』この結論は、農民ブルジョアの發達と發展とが、工業に於ても農業に於ても互に相提携して進むものであると云ふ事實を打消す言葉の一範例である。(註。ヴェー・ヴェー氏もその著書『家内工業概觀』の第八章に於てこの問題に就き同樣の言葉に滿足してゐる。『農業は工業を支へるものである。』『家内工業は、工業の盛んな諸縣に於ける農業に取つて、最も嘱望さるべき障壁の一をなしてゐる。』證據?——幾らでもある。例へば、經營主なる皮革業者、糊

製造者、バタ製造者等を見ても、彼等の農業が大衆の農業より高いことが分る。）

ペルミに於ける一八九四年乃至一八九五年の家内工業記録の資料は、同様の現象を指摘した。即ち小商品生産者（大經營主及び小經營者）の農業は、何よりも高く立つてゐる。彼等は農業勞働者を使用してゐる。手工業者の農業は、程度が低く、買占人の爲に働いてゐる家内工業家等の農業狀態は、最も成績が惡い。（雇傭勞働者や各種部類の經營主の農業に就いては、殘念ながら資料が集められてゐない。）なほ記錄は『家内工業家』なる非農業家と農業家とを比較すると、（一）勞働の生産力が非常に高いこと、（二）營業からの純收益額が比較的多いこと、（三）文化程度と教育程度とが遙かに高いことなどで、前者と後者とが餘程異つてゐることをも明かにした。そしてこれ等は悉く、上述の斷案を、即ち資本主義の初期階程に於てさへ、住民の生活水準を高めようとする工業の傾向が認められるものであると云ふ斷案を肯定する現象である。

最後に、營業と農業との關係問題に關連して、次の如き事情がある。より大きい作業場は、普通より長い勞働期間を有つものである。例へば、モスクワ縣の家具製造業に於て、ベーラヤ・デレーヴニャ村地帶に於て、勞働期間は、八ケ月に相當し、（工場の平均人員は、此處では勞働

者一・九。）クリヴィエ地帶では十ケ月（一作業場に對し勞働者二一・九。）大型家具地帶に於て、十一ケ月（一作業場に對し、勞働者四・二。）に相當してゐる。ウラヂーミル縣の製靴業に於て、十四の小工場に於ける勞働期間は、四十週間に相當してゐる。八の大工場に於ける勞働期間は、（小工場に於ては、一作業場に對し勞働者二一・四であるに反し、大工場に於ては、勞働者九・五である。）四十八週間に相當してゐる。

勿論、この現象が大作業場に於ける勞働者（家族勞働者、雇傭工業勞働者及び雇傭農業勞働者）の大多數と關係してゐることも、またこの現象が雇傭勞働者の大なる堅實性と工業的活動に於ける彼等の專門化的傾向とを吾人に說明してゐることも當然である。

で、茲に上述した『營業と農業』とに關する資料の總括をする。吾人が觀察して來たやうに資本主義の低い階程に於て、工業家はまだ殆んど農民から分離しないのが普通であつた。營業と農業との結合は、農民の分解が、激しくなり深くなる經路に於て、極めて重大な役目を演ずるものである。即ち裕福で資產ある經營主等は、工場を開き、農村プロレタリアート中から勞働者を雇ひ、商業的卸賣的營業の爲に資本を蓄積する。その反對に、貧農の代表者等は、雇傭

勞働者や買占人の爲に働く家内工業家や商業資本の力に最も激しく壓迫される家内工業家なる小經營者の下級團體を提供する。斯くして營業と農業との結合は、資本主義的關係を堅固にし發達せしめ、この關係を工業から農業に及ぼし、又その反對に及ぼす。(註。例へばヴラヂーミル縣の毛織業に於て、大『工場主』と女工とは、農業の最も高い水準を有つてゐる。『生産停滯の時期には、女工等は地所を買つて、農業を經營し、營業を全く放棄しようとする。』この例は注目に値する。何となれば、斯の如き事實は、何うかすると民衆主義者等に、『農民は更に農業の方へ向つてゐる。』とか、『土地から追ひ拂はれた者達は、土地に歸るべきである。』とか云ふやうな結論を下さしめることがあるからである。)

資本主義社會に固有の工業と農業との分離は、現今の程度ではまだ極めて原始的な形態に於て現はれてゐるが、然しその分離は既に現はれてゐるのである。而も特に重大視すべき點は、その現はれ方が、民衆主義者等の考へる所と異つてゐることである。民衆主義者は、工業は農業を『害する』ものではないと主張すると同時に、有利な營業の爲に農業經營を放棄することが惡いのだと言つてゐる。然し斯の如き考へ方は、虚構である。(事實からの結論ではない。)

惡い虚構である。何となれば、この虚構は農民社會の凡ゆる經濟組織に浸透してゐる矛盾を無視するからである。工業と農業との分離は、農民社會の分解と關連して進むものである。農村の兩極にある異つた道を進むものである。即ち裕福な少數農民は、工業的作業場を設置し、これを擴張し、農業を改良し、耕作の爲に小作人を雇ひ、一年中の大部分を營業に費し、而して――營業發達の或る程度に於て、――工業的企業と農業とを分離することを寧ろ便利とする。即ち耕作を一部の家族の手に渡し、或は建物や家畜や其他のものを賣り拂ひ、そして町人に、商人に變ることを寧ろ便利とする。(註。『農民等の説明する所に依ると、最近或る裕福な工業經營者等は、營業の爲にモスクワへ移住した云ふことである。』)

この場合に於て、工業と農業との分離に先んずるものは、農業に於ける企業關係の組織である。農村の他の範圍に於て、工業と農業との分離は、貧農が破産して、雇傭勞働者(工業勞働者と農業勞働者)に變ずる點にある。この範圍に於て、土地を放棄させるものは、營業の有利なことではなくして、貧困と破産とである。貧困と破産とは、土地ばかりでなく、獨立した營業勞働をも放棄させる。で、工業と農業との分離の經路は、茲では小生産者の强奪經路の中に

あるのである。

八　『營業と農業との結合』

これは、民衆主義者等が好んで用ゆる方程式である。この方程式に依つてヴェー・ヴェー氏及びヱヌ氏一派は、ロシアに於ける資本主義問題を解決しようと考へてゐる。『資本主義は工業と農業とを分離する。』『國民的生産』は、典型的常規的な農民經濟に於て工業と農業とを結合する——彼等の理論の堂々たる部分は、斯の如き不器用な矛盾の中にある。吾人は、今茲で我國の農民社會が、實際には如何にして『營業と農業とを結合しつゝあるか』と云ふ問題に就いて總括的結論を下す可能を有つてゐる。何となれば農業に從事する農民社會に於ても、營業に從事する農民社會に於ても典型的關係が既に詳細に省察されたからである。それで『營業と農業との結合』の多種多樣な形式を算へることにする。これ等の形式は、これをロシアに於ける農民經濟の中に見ることが出來る。

（一）家長制度の（自然的の）農業は、家庭營業と（即ち自家用としての原料加工と）もまた土

地所有者の爲に働く奴隷的勞働とも結合されてゐる。

農民間に於ける『營業と農業』とのこの種の結合は、『中世紀の經濟制度に取つて最も典型的なものであり、この制度の必然的構成分子であつた。』(註。コルサーク氏は、前記の書物の第四章に於て、この種の歴史的證據を擧げてゐる。例へば、『修道院長が紡績用の亞麻を村ぢうに配つて歩いた』とか、農民は土地所有者の爲に『契約的勞働を』する義務があつたとか云ふやうな事實を擧げてゐる。)改革後のロシアに於ては、斯の如き家長制度の經濟から――さうした經濟に於ては、まだ資本主義も商品の使用も全くない――たゞ碎片が殘つたゞけである。即ち農民の家内營業と請負勞働とが殘つたゞけである。

(二)、家長制度の農業は、手工業の形を採つた營業と結合してゐる。

この結合形式は、前の形式と極めて近い關係にある。たゞ手工業者は金錢で支拂を受け、器具や原料や其他の物品を購入する爲に市場に現はれる場合、此處にも商品の流通が行はれて來ると云ふ點に於てのみ兩者の差異がある。

(三)、家長制度の農業は、市場の爲に工業生産品を小規模に生産する仕事と、即ち工業上に

於ける商品生産と結合されてゐる。家長制度の下にある農民は、小商品製造家に轉化する。小商品製造家は、既に吾人の指摘した通り、雇傭勞働の使役に、即ち資本主義的生産に傾く。この轉化の條件となつてゐるのは、既に述べたやうな農民社會分解の程度である。即ち既に吾人の瞥見した如く、工業上に於ける小經營主並に經營者は、多くの場合、裕福な、若くは資産ある農民の集團に屬してゐるのである。工業上に於ける小商品生産の發達も亦、農民なる農業家の分解に更に衝動を與へるものである。

(四)、家長制度の農業は、工業に於て(農業に於ても同樣)雇傭勞働と結合されてゐる。(註。既に述べた如く、我國の經濟上の文献にも、經濟上の統計にも、多く術語が雜然と混用されてゐる。例へば、農民の『營業』と云ふ中に、家内工業も、請負勞働も、手工業も、小商品生産業も、商業も、工業上に於ける雇傭勞働も、農業上に於ける雇傭勞働も入つてゐるが如きである。次にこの混用を民衆主義者等が如何に利用してゐるかと云ふ實例を擧げる。ヴェー・ヴェー氏は『農業と營業との結合』を讃美すると同時に、更に説明として『林業』と『苦役』とを擧げてゐる。即ち彼は(農民は)强く、そして困難な勞働に慣れてゐるから、從つて凡ゆる苦役に

も堪へる云ふことを指摘してゐる。斯の如き事實も『我々は職業の區別に對する反對を見る』とか『自然經濟の全盛時代に形造られた生産組織の堅牢を見る』とか云ふやうな結論を立證する爲に、他の幾多の事實の中で意義を有つてゐる。斯くして農民が林業勞働者及び苦役勞働者に轉化すると云ふことは、特に自然經濟の堅牢を證明するものとなつた。)

この形式は、先の形式の必然的補足となつてゐる。即ち先の形式に於て、商品となつてゐるものは、生産品であるが、この形式に於ては、勞働力である。工業に於ける小商品生産は、前述の如く、買占人の爲に働く雇傭勞働者と家内工業家との出現を必然的に伴ふものである。『農業と營業とを結合』するこの形式は、凡ての資本主義國に固有なもので、而も改革後のロシアの最も著しい特質の一は、この形式が極めて迅速に、そして極めて廣い範圍に及んだと云ふ點にある。

(五)、小ブルジョア(商人)の農業は、小ブルジョアの工業(工業に於ける小商品生産や小商業や其他)と結合してゐる。

第三の形式とこの形式との差異は、この形式に於ける小ブルジョア的關係が、獨り工業のみな

らず、農業をも網羅してゐると云ふ點にある。この形式は農村の小ブルジョア經濟に於ける營業と農業との結合の最も典型的なものであるから、從つて凡ての資本主義國にも特有なものである。たゞロシアの經濟主義者なる民衆主義者の前途には、小ブルジョアなき資本主義發見の名譽があつた。

(六)、農業に於ける雇傭勞働は、工業に於ける雇傭勞働と結合してゐる。そして營業と農業との斯の如き結合が、如何にして現はれるかと云ふことや、この結合が如何なる意義を有つてゐるかと云ふことなどは、既に前にも述べた通りである。

故に、『農業と營業との結合』する形式は、我國の農民社會に於ては、極めて多種多樣である。即ち自然經濟の優勢な極めて原始的な經濟組織を表現してゐるやうな形式もあれば、資本主義の高度の發達を表現してゐるやうな形式もある。またこの兩者間に幾多の階段もある。一般的方程式(『營業と農業との結合』だとか、或は『工業と農業との分離』だとか云ふやうな方程式)の範圍に留まると、資本主義發達の實際的過程を說明する場合、一歩も進むことが出來ない。

九　我國の農村に於ける資本主義前の經濟に就いて

我國に於て『ロシアに於ける資本主義の運命』に關する問題の眞髓は、如何に速かに？（即ち如何に速かに資本主義は發達しつゝあるか？）と云ふ問題として主要な意義を有つてゐるかのやうに屢々論じられてゐる。實際、比較の出來ぬほど重大な意義を有つてゐるのは、如何にして？　と云ふ問題と、何處から？　と云ふ問題とである。（即ちロシアに於ける資本主義前の經濟組織は、如何なるものであつたか？　と云ふ問題である。）

民衆主義的經濟學說の最も主要な誤謬は、この二つの問題に對する回答が正しくない點にある。即ちロシアに於ける資本主義は、如何に發達しつゝあるかと云ふことを、誤つて紹介してゐる點にある。資本主義前の事情を僞造的に理想化してゐる點にある。吾人は第二章に於て（一部分は第三章に於て）それからこの章に於て、小農業と農民の營業とに於ける資本主義の最も原始的な階程を研究考察したが、斯の如く研究し考察してゐるうちに、資本主義前の事情の

大要を餘儀なく擧示せねばならぬやうなことが度々あつた。で今若し吾人がこれ等の大要を綜合せんと試みるならば、吾人は次の如き結論に達する。即ち資本主義前の農村は、それ自身（經濟的方面から見ると）小さい地方的市場の網をなしてゐる。そしてその地方的市場は、個々獨立の經營と、その間に於ける幾多の中世紀的障壁と、中世紀的支配力の殘骸とで、分裂してゐる小生産者の極めて小さい集團を連絡させてゐる。

小生産者の分裂に就いて云へば、この分裂を最も浮刻的に現してゐるのは、彼等の分解である。この分解は、既に上述した通り、農業に於ても工業に於ても立證された。然しながら分裂は、決してこれだけに留るものではない。農民等は土地共有團によつて、極めて小さい行政財政的土地所有者の聯合に統一されてゐると同時に、分割地の大小により、納稅額により、樣々な部類と樣々な等級とに細分されてゐる。

その例は、サラトフ縣の自治會統計集を取つて見ても分る。サラトフ縣では農民社會は、左の如き部類に分れてゐる。即ち、土地を與へられた農民、土地所有農民、完全なる土地所有者、國有農民、共有地を有する國有農民、四分の一の土地を有する國有農民、地主所屬農民から出

た國有農民、貴族の領地所屬農民、官有地租借人、土地を所有せざる農民、前地主所屬自作農民、買收莊園に於ける農民、前貴族領地所屬自作農民、移住自作農民、移住農民、土地を與へられた前地主所屬農民、前國有自作農民、自由に解放された農民、免稅農民、自由耕作人、一時的苦役農民、前工場所屬農民等であるが、なほ登錄農民と外來農民とがある。これ等の部類は何れも、耕地の關係や、分讓地の大小や、納稅額その他の歷史に依つて區別されてゐるのである。またこの分類の中にも、更に樣々の區別がある。即ち時としては同一村落の農民が『前エヌ・エヌ氏の』とか『前エム・エム夫人の』とか云ふやうに、全く異つた二つの範圍に區別されてゐることさへある。これ等の色彩は、中世紀には、遠い過去の時代には、自然であり、必然であつた。然し農民社會の階級的蟄居が、現在も保存されてゐることは、實に甚だしき時代錯誤(アナクロニーズム)で、勞働大衆の境遇を非常に惡化するものであるばかりでなく、彼等を新資本主義時代の困難なる事情から毫も救ふものではない。民衆主義者等は、普通この分裂に眼を閉ぢるのが例である。而してマルクシスト等が、農民社會の分解は進歩するものであるとの意見を述べてゐる時にも、民衆主義者等は『土地奪取贊成者』に對し陣腐な反對を叫ぶだけで、この叫びと資

本主義前の農村に關する自分の思考の全く誤りであつたことを隱蔽しようとしてゐる。資本主義の進歩性を信ずるには、小生產者等の驚くべき分裂を思つて見るだけでも澤山である。その分裂は、家長制度の農業の避け難い結果であつた。そして資本主義は、經濟と生活との古い形式と、その形式の永久の不動性と常習とを根底から破壞し、その中世紀的障壁內で凝結して了つた農民の土着心を破壞し、新たなる社會的階級を造り、これ等の階級を必然的に連絡し、結合し、國家及び全世界の凡ての經濟生活に(一部分の經濟生活にでなく)能動的に參加せしめんとするものである。

手工業家若くは小工業家としての農民を採つても、諸君は同樣の現象を見るであらう。彼等の興味は、地方村落の小地域の範圍を出ない。土地の市場が餘りに小さい結果、彼等は他の方面の工業家と接觸することがない。即ち彼等は火のやうに『競爭』を恐れてゐる。小手工業家と小工業家とは、何人にもまた何物にも、その常習的な畏縮を脅かされるものではないだけ、それだけ家長制度的天國を破壞する競爭を恐れてゐる。この小工業家等に對する關係から云ふと競爭と資本主義とは、有益な歷史的事業を行つてゐる。即ち競爭と資本主義とは、小工業家等